太平天国の北伐中期における諸問題
—山西から天津郊外まで

菊　池　秀　明

はじめに

近年における中国史研究の大きな変化は、新たな史料の発掘とそれに伴う歴史像の再構築という動きであろう。なかでも清朝の行政文書である檔案史料の公開は、それまで編纂された史料集や地方志レヴェルでしかわからなかった歴史の実像を我々に開示することになった。また中国近代史研究における新史料の公開は、それぞれの時代の政治的要請に基づいた一面的な歴史認識の見直しを可能にした。かつて中国革命の先駆と賞賛され、現在はその破壊的な側面を批判されることが多い太平天国（1850 年–64 年）も例外ではなく、今こそ客観的な立場からこの運動の実像を解明する必要が高まっている。

筆者は別稿において太平天国が実施し、後に孫文らの革命運動に大きな影響を与えたと言われる北伐前期（1853 年 5 月–9 月初旬）の歴史について考察した。それによると北伐軍の当初の兵力は 2 万人強で、清朝の防御態勢が未整備だったこともあって大きな抵抗を受けずに軍を進めたが、黄河の渡河にあたって後衛部隊を南岸に残したため、援軍との合流を目的として懐慶攻略戦を行なった。だが太平軍は 2 ヶ月近い時間を費やしたものの懐慶を陥落させることが出来ず、物資の獲得による戦闘力の強化は実現しなかった。かえって各地の清軍が到着して包囲が狭まり、やむなく太平軍は防備の手薄だった西北方面へ脱出したことを指摘した[1]。

本稿は北伐中期の歴史として、太平軍が山西へ進出した 1853 年 9 月から天津郊外の独流鎮、静海県で籠城を続けた53年末までの動向にスポットを当てる。北伐史のクライマックスに当たるこの時期の歴史については、簡又文氏[2]、張守常氏[3]、堀田伊八郎氏[4]、吉澤誠一郎氏[5]など多くの論者が言及している。本稿はこれら先学諸氏の研究成果に学びながら、中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』[6]、中国社会科学院近代史研究所編『太平軍北伐資料選編』[7]さらには台湾故宮博物院に所蔵されている『宮中檔咸豊朝奏摺』（未公刊）[8]を用いて分析を進めたい。

以下では北伐軍の進撃過程にあわせて、主として 4 つのトピックを取りあげる。①山西巡撫、直隷総督の処罰に見られる清朝統治の問題点、②太平軍の直隷（河北）進出に伴う北京のパニック現象、③供述書に見られる北伐軍将兵の実態と華北民衆との関係、④独流鎮、静海県における籠城戦の目的とその影響である。また北京における防衛体制の強化については、出来る限り多様な視点から考察を加えたいと考えている。

1. 北伐軍の山西、直隷進出とその影響

(a) 北伐軍の山西進撃と清朝の地方統治

まずは懐慶脱出後の太平軍の足取りを追う作業から始めたい。9 月 1 日に濟源県を通過した太平軍は、2 日に河南省境の邵原関を越えて山西へ入った[9]。邵原関は天然の要害であったが、北伐軍兵士だった陳思伯が「惜しむらくは備えを置かず」[10] と指摘したように、清軍はここに僅かな兵しか配置していなかった[11]。4 日に垣曲県を占領した太平軍は[12]、7 日に絳県に至り[13]、8 日に「土匪」の協力を得て曲沃県へ進出した[14]。また 12 日には山西南部の重要都市で「省城の保障」である平陽府城（臨汾県）を陥落させた[15]。当時平陽の守備兵は 200 名と少なく、知府何維墀は住民を組織して一度は攻撃を斥けた。だが太平軍の砲撃が始まると「商民は驚き散じ、太守は止めることが出来なかった」[16] とあるように、訓練不足を露呈して敗北したという。

9 月 14 日に太平軍の先鋒隊が洪洞県を占領し、省都太原を窺う動きを見せると、救援にかけつけた陝安鎮総兵郝光甲は平陽北部の高河橋で攻撃をかけた。15 日には懐慶から太平軍を追撃してきた内閣学士・幫辦軍務の勝保が平陽付近に到着し、洪洞県の北にある紀落鎮に陣を敷いて太平軍の北上を牽制した[17]。すると突然太平軍は進撃方向を東へ変え、17 日には曲亭鎮で郝光甲の部隊を打ち破った[18]。また 23 日には屯留県の柳花泊で澤州から太平軍の行く手を阻むべく北上してきた江寧将軍托明阿の軍と交戦し、托明阿を負傷させた[19]。そして 24 日に山西東南部の潞城県を占領した太平軍は[20]、黎城県を経て 25 日に再び河南へ入った[21]。さらに涉県、武安県を経由した太平軍は 28 日夜に観音嶺を越え、直隷の臨洛関へ進出したのである[22]。

わずか 1 ヶ月弱で山西南部を席巻した太平軍の迅速な行動は、清軍の防衛体制に大きな混乱をもたらした。勝保が「逆匪（太平軍）にとって難所を行くのは得意技だが、わが軍は食糧をかついで歩くために多くが疲労してしまう。また逆匪は一昼夜で一百四、五十里（70 キロ強）の遥かまで行軍してしまうので、いきおい追撃しきれない」[23] と指摘したように、清軍は不慣れな山道もあって動きが緩慢であり、多くが太平軍を捕捉できなかった。また平陽付近で太平軍と交戦した郝光甲の部隊は当初 200 名（のち 3,000 名の増援を受けた）、屯留県で迎撃した托明阿の軍も 1,500 名（実際に戦ったのは騎兵 200 名という）に過ぎず、兵力不足から太平軍に打撃を与えることは出来なかった[24]。

いっぽう太平軍は進撃の過程で兵力を増加させていた。太平軍が山西へ入った当初、山西巡撫哈芬は「山西の人民は臆病な者が多いので、賊が脅して従わせても解散させるのは容易であり、土匪もいないために結託することは出来ない」[25] と予想した。だが現実に太平軍は各地で「壮年の者をことごとく連れ去った」[26] とあるように新兵を徴発し、懐慶を撤退した太平軍の残存兵力は少ないと主張していた欽差大臣・直隷総督の訥爾經額でさえ、「山西から東へ逃れたこれらの匪徒は、道中人々を無理に従わせたため、その数は一万人を下らない」[27] と報告せざるを得なかった。

またこれは山西のケースに限ったことではないが、太平軍は「難民、乞食および芸人や物売りに化け、山を秘かに越えて各州県を襲撃しようとしている」とあるように、あらかじめ変装した兵士を進撃先に潜伏させ、内応工作を行わせた。じじつ垣曲県は逮捕された太平軍の工作員を難民と取り違え、釈放したために陥落した[28]。また太平軍が到達しなかった地区でも 800 名の兵を率いて長子県の奪取をめざした「軍師」張淮藩、太行山口まで斥候に出ていた孫連璧（湖北蘄州人）など多くの太平軍将兵が摘発されている[29]。

これら太平軍の戦いぶりとその目標について、勝保は次のように報告している

> この逆［匪］は元々行き詰まったあげく、捨て身で奔走した者たちで、前方（山西）の兵が挟み撃ちにすれば、容易に対処できた筈だった。だが垣曲の守備兵が賊の到来を聞くや敗走し、彼らをなすがままに放置した結果、ついに事態を誤ることになった。山西の地方官たちは前線に防禦の兵がいることに安心して、全く準備をせず、いざ賊がやって来た時には、その兇暴さを見て逃亡した……。山西は絳県から平陽まで二百余里のあいだ、一兵たりとも抵抗する者はおらず、賊はあたかも無人の地を行くが如きで、再び勢いが盛んとなったのである……。
>
> 逆匪が［懐慶から］逃走を始めた時、悪賢い者は四、五千人に過ぎなかったが……、いまや行く先々で人々に参加を強要し、その数はすでに一万人を超えた。捕らえた長髪賊の供述によれば、その目的は山西から隙を突いて［直隷へ］入り、一気に京師（北京）を犯すことにある。このため城を破っても、これを守ろうとはしない……。韓信嶺は山西の要所であるが、現在は［守備に当てる］兵が足りない。だが援軍の到着を待っていたら、おそらく賊はすでに太原を通過しているだろう。もし直隷に接近すれば京師は震動し、戦局全体への影響は想像もつかない。[30]

北伐軍が安徽、河南を進撃していた時と同じく、地方官たちの無能ぶりが告発されているが、当時山西からは江南、直隷へ 9,000 名余りの兵が動員されるなど防衛力は手薄だった[31]。哈芬も 8 月末の段階で太平軍に西進の動きがあることを察知していたが、懐慶に近い陽城県の防備を固めるのに手一杯で、垣曲県をめざした太平軍の「詭計」に裏をかかれたという[32]。なおこの勝保の上奏は、清朝官員で北伐軍の最終目標が北京攻略にあることを初めて明確に指摘したものとして注目される[33]。

さて首都を危険にさらしかねない失態を前に、太平軍の進撃を止められなかった責任問題が浮上した。このとき処罰を受けたのが哈芬と訥爾經額の 2 人であった。彼らに浴びせられた非難からは、当時の清朝による地方統治のあり方を窺うことができる。

まず哈芬について見たい。最初に彼を批判したのは訥爾經額であった。哈芬は太平軍が懐慶で大打撃を受けたとする訥爾經額の報告に疑問を呈し[34]、また訥爾經額に対する援軍要請に反応がないと報じていた[35]。訥爾經額が哈芬に山西の警備強化を要請し、「布置は周到」

と回答して来たにもかかわらず、実際は全くの「空言」[36]であったと告発したのは、自らの立場を弁護するためであった。

次に哈芬批判の先頭に立ったのは山西布政使郭夢齡であった。彼は太平軍の山西進出時に澤州にいた哈芬がすぐに出発せず、北に大きく迂回して太平軍との遭遇を避けたこと、彼の家族がいち早く太原から避難したことを訴えた[37]。これを受けた清朝は 9 月 18 日に哈芬を解任し、取り調べのため北京へ送るように命じた[38]。だが郭夢齡の告発はやまず、哈芬に太平軍を迎撃する意志がなく、韓侯嶺へ向かうと言いながら祁県へ退いてしまったこと、手持ちの兵 1,500 名が 100 名に減ってしまうなど将兵を統率出来ていないこと、軍事費の不足を補うべく人々に銀を供出させようと図り、その通達を布政使の名義で出すように命じたことを非難した[39]。

さらに哈芬に追い打ちをかけたのは、前任太僕寺少卿の徐繼畬、前任鴻臚寺卿の賈克慎など太原を中心とする山西出身のエリートたちであった。彼らは哈芬が南部三県の陥落を防がず、太原鎮総兵烏勒欣泰の軍が平陽救援に向かうのを許可しなかったために事態を悪化させたと訴えた[40]。また哈芬が太原に戻ろうとしていることを知った「官紳」が怒りの声をあげ、郭夢齡と相談のうえ彼の入城を実力で阻止しようと図っていると指摘した。そして太平軍進攻の危険が迫った現在、「内乱」を未然に防ぐには哈芬を厳罰に処して「山西士民の心を安んじる」ことが必要だと主張したのである[41]。

なぜ哈芬はここまで告発を受けたのだろうか。11 月に北京で恭親王奕訢らの取り調べを受けた哈芬は、2 枚の供述書を提出した。それによると山西には清く真面目な官僚を受け入れない悪習があり、哈芬が赴任以来私情にとらわれず、賄賂を受け取らなかったために、民衆の支持を得たものの、強欲な者たちの恨みを買ったと告白した。また郭夢齡の背後にいたのは「裁撤」された各衙門の属吏、「濫保」を望んで果たせなかった劣員、寄付を行いながら褒美を得られなかった紳士たちであり、「自分は決して怯えて前進しなかったのではなく、藩司（郭夢齡）が誣告を聞き入れて、紳士たち（徐繼畬）らを唆して上奏させたのだ」[42]と主張している。

それでは実際はどうだろうか。太平天国の挙兵以来、膨大な軍事費支出に苦しんだ清朝は山西出身の官僚や商人から義捐金を募り、1853 年 6 月に巡撫となった哈芬もこの政策を引き継いだ[43]。だが彼が「太原に来た紳士たちと謁見したところ……、先の捐輸で天恩を蒙り、［戸］部にそれぞれ評定するように命じたが、数ヶ月が経つというのに、いまだ［戸］部から承諾したかどうかの返事がなく、許可証を受け取れないと言っている」[44]と述べたように、経済的な貢献にもかかわらず期待通りの昇進ができないことに対するエリートたちの不満がくすぶっていた。

また新任の地方長官と下級官員が衝突するケースは珍しくないが[45]、哈芬と郭夢齡のケースでは省都太原の防衛を優先させるか、省境の防備を固めるかで意見が分かれた。その実郭夢齡は地元の利害を代弁した徐繼畬らの要請に配慮して、中央の指示を守ろうとする哈芬と

対立したのである[46]。むろん哈芬も太平軍の接近に伴い、直隷に動員されていた大同兵の帰還を求めるなど地域の利害に無関心だった訳ではなかった[47]。また山西を代表するエリートである徐繼畬らに「一切の事宜を幫辦」[48]させたのも、哈芬が自ら裁可を求めた措置だった。つまり当時の中国社会においては、清末にその台頭ぶりが顕著となる地方エリートの意向を無視しては地方統治が成り立たなくなっていた[49]。

いっぽう訥爾經額の処罰について見ると、最初に彼を弾劾したのは江南道監察御史の啓文だった。彼は山西へ入った太平軍が垣曲県城を攻撃出来たのは戦力が衰えていない証拠であり、敗走に見せかけて清軍を油断させたに過ぎないと分析した。また訥爾經額は太平軍を追撃すべきだったが、「安撫」を名目に懐慶に留まり、指揮が統一されなかったために太平軍の勢いを取り戻させてしまった。つまり訥爾經額は懐慶救出の功績よりも、太平軍の山西進出を許した罪の方が大きいと言うのである。

さらに啓文は各省の地方長官が真剣に太平軍と戦っていないと述べたうえで、訥爾經額が「毎日午後には部下と会って公務をこなそうとしないため、役人の規律は乱れ、強盗事件が頻発している」[50]と批判した。すると清朝は 9 月 23 日に勝保を訥爾經額と交代で欽差大臣に任命し、訥爾經額には「懐慶に留まる必要はない」と述べて直隷、山西交界の防備を固めるように命じた[51]。

ところで以前の通説では、訥爾經額が処罰を受けた原因は臨洛関で太平軍に大敗を喫したためとされてきた。薛福成「訥相臨洛関之敗」によれば、訥爾經額が 1 万人以上の兵を率いて直隷救援に向かうと、潞城、黎城県から臨洛関へ通じる小道に守備兵を置くべきことを献策する者がいた。訥爾經額はこれらが山西省の管轄地であるため、平時の通例にならって哈芬に防衛を依頼した。だがこの要請が届く前に太平軍は潞城、黎城県を通過して臨洛関へ進出した。突然の太平軍出現に慌てた清軍は敗北し、訥爾經額は広平府城に逃げ込んだが、総督の印鑑から幕僚まで失ったために上奏文すら書けなかったとある[52]。

それでは実態はどうだったのだろうか。訥爾經額の供述によれば、太平軍の山西進出以来彼は 14,000 名の兵力を山西へ送り、数十名の兵を連れていたに過ぎなかった。訥爾經額が 9 月 28 日に臨洛関へ到着すると、新たに動員した吉林兵 750 名がいたものの、馬や軍装はなお輸送中であった。また臨洛関は城の荒廃が著しく、陣地を設けることが出来なかった。訥爾經額は山西、河南両省に臨洛関へ通じる要所の警備を要請していたが、実際には行われず、太平軍東進の情報も地方官から届かなかった。難民の話でようやく太平軍の接近を知った訥爾經額は斥候を派遣したが、彼が復命した時にはすでに太平軍が迫っていた。やむなく訥爾經額は吉林、山西兵950名および永年県監生宋遵信の率いる団練を率いて戦ったが、兵力および弾薬の不足をカバー出来ずに敗北したという[53]。

臨洛関陥落の知らせを受けた清朝は、10 月 3 日に省境防衛を怠った罪によって訥爾經額を免職処分としたが、引き続き太平軍の進撃を食い止めるように命じるなど、すぐに厳しい処罰を加えた訳ではなかった[54]。むしろ訥爾經額に対する激しい批判を招いたのは、敗北後

の彼が広平に留まり、北へ向かった太平軍を追撃しなかったことだった[55]。

例えば光禄寺卿宋晋は、訥爾經額が広平へ退却し、今また冀州経由で正定へ向かおうとしているのは「巧みに賊を避けている」のであり、満洲人である彼に対する処分は哈芬の例と比べて余りに軽く、「哈芬の心を納得させることは出来ない」と指摘した[56]。また翰林院侍読学士何彤雲は、訥爾經額の犯した罪は哈芬と変わりないが、もたらした災厄は訥爾經額の方がはるかに大きく、彼を厳しく罰しなければ他の官僚たちに弁解の口実を与えてしまうと警告した[57]。結局清朝は兵部尚書桂良を後任の直隷総督に任命した後、10 月 10 日に訥爾經額を北京へ送り、取調べのうえ処罰することを命じた[58]。

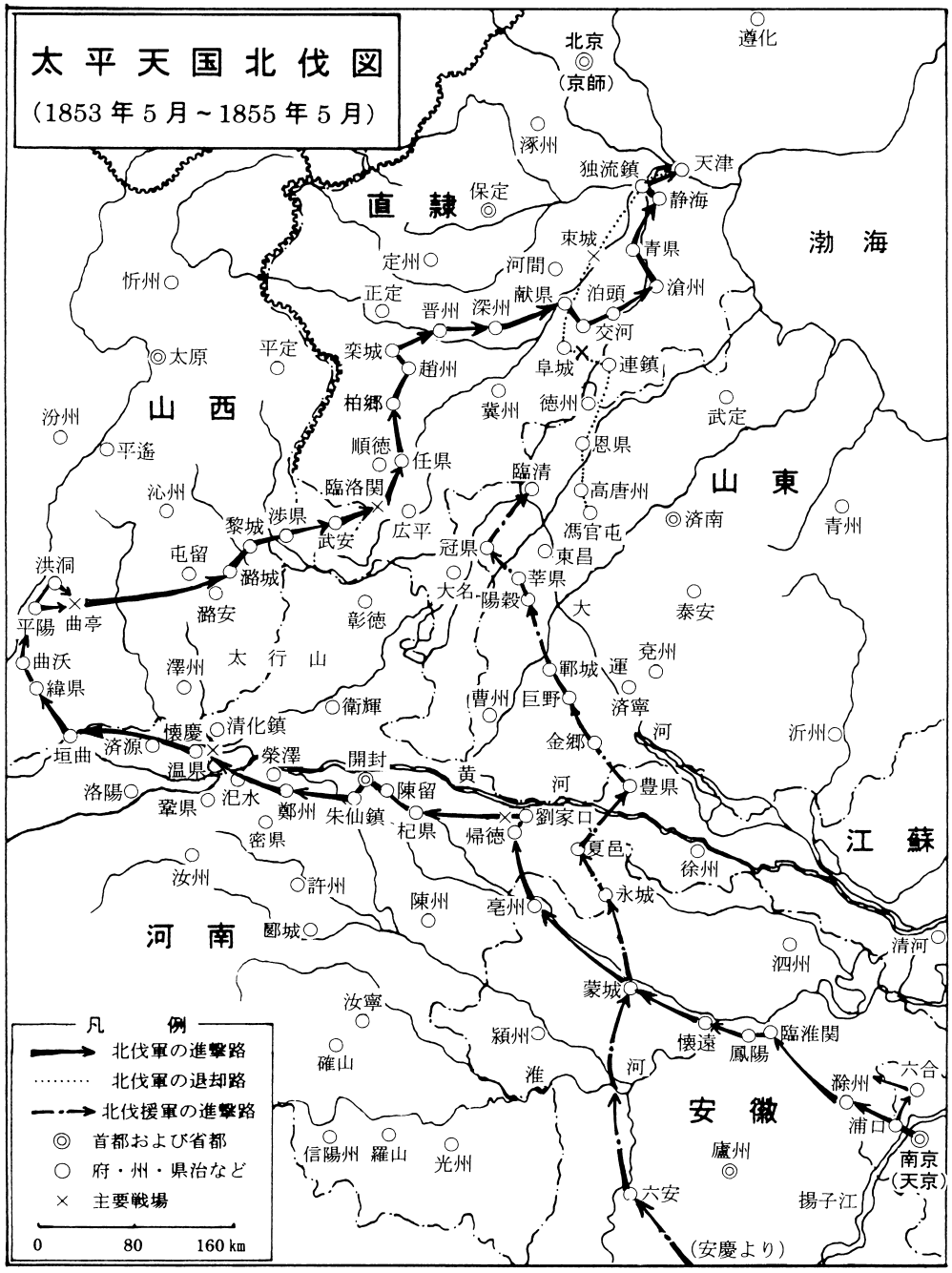
『清史稿』訥爾經額伝は、清朝は重要な戦役で満洲人を司令官とする伝統があったが、1851 年に広西へ赴任した賽尚阿と訥爾經額の敗北によってその誤りに気づいたと評している[59]。11 月に恵親王綿愉らの取調べを受けた訥爾經額は「斬監候、秋後処決（秋を待って斬刑）」という重い刑を言い渡された[60]。咸豊帝は道光帝の信任が厚かった訥爾經額にあえて厳罰を下し、多民族王朝としての清朝の公正さを示すことで、異民族王朝の打倒を唱える太平天国の主張に反論し、漢人官僚の動揺を封じようとしたのである。

(b) 太平軍の深州進出と北京における防衛体制の強化

清朝が訥爾經額の処分で揺れている間、太平軍はかなりのスピードで北進を続けていた。9 月 30 日に臨洛関を出発して沙河県を占領した太平軍は、10 月 1 日からは任県、隆平県、柏郷県、趙州、栾城県を次々と占領した[61]。また 6 日に藁城県を占領してチャハル副都統西凌阿の率いる軍と交戦し[62]、7 日には藁城県の北で要所となる滹沱河を渡った[63]。さらに 8 日には晋州を占領し[64]、9 日には東へ進んで深州を陥落させた[65]。

龔淦『耕余瑣聞』は 10 日間で 9 つの州県を破った太平軍の進撃は旋風のようであったが、それが可能になった理由として清朝側の防衛施設および武器の不備、情報不足、戦略の欠如があり、日頃官民の信頼関係が欠けていたために、城を死守する地方官がいても助ける者はなかったと述べている[66]。確かに太平軍の深州到達後、饒陽県知県秦聚奎の率いる練勇 14,000 人がその東進を牽制したのを除くと、団練による抵抗は見られなかった[67]。直隷でエリートによる団練結成が軌道に乗ったのは、清朝の命令を受けた直隷布政使張集馨が各地に官員を派遣して指導させてからのことである[68]。

いっぽう新たに欽差大臣に任命された勝保は、太平軍の進撃ルートの前方に出るべく山西から直隷正定府への道を急いでいた。10 月 5 日に山西平定州についた彼は、固関で長城を越えて直隷へ入り、8 日に正定に到着した[69]。9 日に太平軍が晋州へ向かっていると知った勝保は追撃しようとしたが、直隷総督桂良から太平軍が省都保定から 50 キロ余りの定州李青果村に到達したとの通報を受け、急ぎ北へ進路を変えた[70]。ところが定州に到着してみると太平軍の姿はなかった。その情報は元々望都県から寄せられた誤報だったのである[71]。さらに太平軍が祁州方面にいるとの知らせが入り、兵を祁州に送ると、今度は張集馨から深州



が占領されたとの報告に接したという。

こうした情報の錯綜は、連絡の遅延と共に清軍の作戦活動を難しいものにした。勝保は清軍同士の連携が悪く、近くにいる筈の部隊ともなかなか連絡がつかないと述べたうえで、その原因として地方官が民心の動揺を恐れて車や馬の準備を怠り、いざという時に徴発に応じられないことを挙げている。勝保が理藩院尚書恩華に送った書簡が大幅に遅れただけでな

く、緊急の上奏文にもしばしば遅れが発生した。北京からの指令が不完全な体裁で届くこともあり、こうした音信の不通が戦局を左右しかねないと指摘している[72]。

また太平軍が定州を占領したとの誤報は、朝廷内にパニックを引きおこした。勝保と親しかった廉兆綸（順天府寧河県人）の手紙によれば、10 月 10 日にこの「荒唐無稽の知らせ」が届くと、咸豊帝は顔を真っ赤にして怒りに震える程のショックを受けた[73]。そして同日の上諭で「なんぞ焦急に耐えられよう」と述べ、勝保、桂良に太平軍の捕捉と保定の死守を命じた[74]。また 11 日には恵親王綿愉を奉命大将軍、科爾沁郡王の僧格林沁を参賛大臣に任命し、北京の防衛を担当させて人心の動揺を防ごうとした[75]。

さて太平軍の進攻に対する北京の警戒感が高まったのは、太平天国が南京を占領した 1853 年 3 月頃からだった。「髪逆（太平軍をさす）が金陵を陥落させると……、人心は動揺し、［北京］全城の錢舗が二月初めに一斉に閉まった」[76] とあるように、南京占領をきっかけに約束手形である「票」への信頼が失墜して取り付け騒ぎが起こり、多くの両替商が閉店に追い込まれた[77]。また太平軍が各地に軍を進めると、北京へ通じる食料の補給路が断絶し、「京城の米価は一斤あたり八十文余りになり、油、塩や燃料の値段が高いのは言うまでもなかった」[78] とあるように北京の物価騰貴を招いた。

その結果北京では、官僚とその家族、商人たちが様々な理由を見つけて外地へ脱出する動きが広がった。巡視中城御史鳳保は 1854 年初めの上奏で「今年の春以来、中央官が暇乞いをして故郷へ戻ったり、豊かな家で家族を連れて避難した者は全部で三万戸を下らなかった。どの街も九割方は空き家となり、人口は日に減少した。以前人口が密集していた北城地区は、昨年の北城司坊による調査では一万八千戸余りだったが、たった一年で八千戸余りとなった。一城がかくの如きであれば、五城は推して知るべしである」[79] と述べている。また脱出者が数十万人に及んだとする説もある[80]。当時北京の人口は 130 万人強であったと推測されるが、かなりの程度まで人口が減少したことがわかる[81]。

清朝が北京の警備強化に本格的に取り組んだのは、太平軍の北伐が始まって間もない 1853 年 6 月のことだった。6 月 24 日の上諭は「京師は根本の重地であり、防範と稽査はもっとも緊要である」と述べ、僧格林沁と歩軍統領左都御史の花沙納、右翼総兵の達洪阿、軍機大臣で内閣学士の穆蔭に北京各旗営の巡回と防衛を行うように命じた[82]。また翌 25 日の上諭では、北京周辺（順天府）で不審者を取り締まるように命じたが、効果があがっていないと述べたうえで、歩軍統領らに内城の警備を強化させると共に、外五城については御史黎吉雲ら 11 名を五城御史と共に警戒に当たらせた[83]。

また花沙納らは 6 月に北京における警備体制の強化について、順天府で行われていた保甲制度（十家門牌）の実行に努めると報告した。だが咸豊帝は旧来の章程を実行すると宣言するだけでは責任逃れをしているに過ぎないと批判した[84]。そこで 10 月 9 日に僧格林沁と花沙納は太平軍の直隷進出に伴う人心の動揺を抑えるために、デマを飛ばす者を取り締まると共に、次のような布告を張り出すことを求めた

逆匪は部隊を分けて河南懐慶を襲ったが、数千名に過ぎず、わが兵によってほとんど討ち取られ、生き延びた者は山西へ逃れたが、再び大軍の攻撃を受けた。彼らは進退窮まって直隷省内へ入ったが、現在各地の官兵や直隷兵、盛京兵、吉林兵などが雲集している。また陛下の指示により、チャハル兵、天津兵も動員されて鎮圧に向かっている。北京内外の兵は全部で数万にのぼり、この醜い反逆者どもはすでに釜の底をさまよう亡霊のようなもので、まもなく殲滅されるであろう。

ただ北京は各地の人々が集まっている。恐らくは無知の人が詳細を知らず、賊が直隷に入ったと聞いて動揺し、軽々しく匪賊が捏造した話を信じて、移住しようと考えたり、店じまいを考えたりした結果、居場所を失ってしまうのは憐れむべきことである。そこで告示を出して北京の商人、士民に知らせることにした。現在賊匪は間違って直隷に入ったが、すでに大軍が四方から包囲している。天はその魂を奪わんとしており、必ずや鎮圧されるのであって、どうして再び猪突猛進することがあろうか？

なんじら商民はおのおの生業に安んじるべきであり、恐れおののく必要は全くない。もしデマを捏造し、人心を惑わす者がいれば、それは奸細と同じである。本王大臣はすでに各地に官員を派遣して密かに取締り行っており、ひとたび違反があれば立ちどころに処刑して、決して容赦はしない。それぞれ遵守して違うなかれ。[85]

ここで清朝は北伐軍の平定が間近であると繰り返し訴えながら、人々に避難の心配をせずに落ち着いて生業に励むように命じている。またデマを流す者に対しては、スパイ行為と見なして厳しい処罰を科すと明言した点が特徴的である。

こうした警備体制の強化は、北京へ潜入した太平軍の密偵や脱走兵を捕らえるなど一定の効果をあげた。歩軍統領や京城巡防処の上奏によれば、北伐軍兵士だった孫東兒（宛平県人）[86]、南京から脱走してきた于二（大興県人）[87]らが逮捕されており、深州で太平軍に加わった王大（祁州人）は上官である「偽大司馬」陳初から北京城内（前門付近）に潜伏先を準備するように派遣された[88]。また江蘇で太平軍に加わった劉澄徹（懐来県人）は「どこに官兵がおり、どこが行きやすいかを探り、併せて部屋を探す」ために天津一帯と北京の間を往復した。彼の供述によれば、北京に潜入した密偵は 3-400 人に及んだという[89]。鳳保も「連日捕らえられたスパイの供述を読んだが、多くが北京へ来て部屋を借り、密かに勾結を図ろうとするものだった」[90]と述べている。

1850 年代初めの北京は「近年来しばしば強盗事件が発生しており、多くの仲間を集めて犯行に及ぶ者もいる」[91]とあるように治安の悪化が懸念されており、警備の強化は窃盗犯やアヘン商人の逮捕にも一役買った[92]。しかし清朝が団練の匪賊殺害を処罰しないこと、太平軍将兵を捕らえた者に褒美を与えることを約束[93]すると、行き過ぎた捜査によって多くの冤罪事件が生まれた[94]。その一つに北京のカトリック教徒に対する摘発があった。1853 年 8 月に信者の張徳順（大興県人）は太平天国が「天主教」を奉じていると聞き、約 1 万人い

た北京の信者に呼応する者が出るかも知れないと考えて、機先を制して僧格林沁の衙門に訴えた。だが張徳順は誰が太平軍と通じているか明らかにすることが出来ず、彼に「教頭」と名指しされた内務府廂黄旗護軍参鄰の鄧廣和、廂黄色漢軍孟徳芳佐領下馬甲の李林に対する取調べでも太平軍と密通した事実は認められなかった[95]。だが人々のカトリックに対する警戒感は消えず、天津でも弾圧が検討されたという[96]。

また北京における厳戒体制は役人たちが新たな不正を働く温床ともなった。10 月に国子監祭酒の奎章は北京城門の衛兵が金を受けとれば不審者を城内へ入れていると指摘し、これを禁止するように求めた[97]。これを受けた何彤雲は城門警備の兵が通行人に金を要求するのは昔からのことだが、最近は交通量が減少して税収が減ったこと、警備の強化は兵士に搾取の口実を与えており、この弊害をなくすことは容易ではないと指摘している[98]。

さらにこの種の不正は北京を防衛する清軍兵士の質と関わる問題であった。鳳保は次のように述べている。北京で頼りになるのは巡防と団練であるが、これらは盗賊を捕らえる程度の効果しか持たない。緑営、八旗は共に有名無実であり、精鋭部隊は外地の防衛に動員されたため、残っているのは役に立たない兵か、欠員を埋めるために一時的に雇われた者たちに過ぎない。彼が視察したどの防衛拠点でも人数が足りておらず、時に見張りや衛兵は弱々しく無力な人々であった。彼らは一日中風雪にさらされて立っていたが、飢えと寒さに苦しんでいた。また支給された武器はみな役に立たなかったという[99]。

当時北京の総兵力は 11 万 6,385 名であったが、城の防禦や皇帝の庭園などの警備、街道の巡査および動員に備えた兵力は 6 万名余りに過ぎず、残りの 4 万名は雑役要員または支給される米で生活している「老人、子供あるいは障害者」[100]であり、戦力とはならなかった。10 月 11 日に咸豊帝は乾宮で綿愉と僧格林沁に対する授印の礼を行い、僧格林沁は精鋭 4,500 名を率いて涿州へ向かって出発した[101]。だが華々しい儀礼にもかかわらず、人々の不安は消えなかった。10 月 22 日に漕運総督福済は、太平軍の接近に動揺した者が咸豊帝に「巡幸の説」すなわち北京脱出を進言するかも知れないが、これらの「謬論」に耳を傾けてはならないと訴えた。この性急な上奏に対して咸豊帝は「現在は少しもこの考えはない……。朕の心は甚だ定まっており、とくに汝に知らせて安心させよう」[102]と回答したが、それは北京の防衛体制がいかに危ういものであったかを物語っている。

1847 年から 12 年間にわたり広東に滞在したイギリス人宣教師 John Scarch は「(太平軍は) 真夏に黄河を渡河し、その驚くべき進撃スピードによって秋の終わりには北京に到達するように思われた。3 万戸の家族が北京を脱出した。広東では北京の陥落は避けられないと考えられていた」[103]と述べている。また 1853 年 12 月にフランス中国公使 M. A. de Bourboulon は「たとえ北京占領といった決定的な事件が清朝政府の滅亡を早めなかったとしても、少なくとも清朝が自ら回復出来ないほどの深刻な打撃を受けたことは間違いない」[104]と本国に報告した。これらは当時のヨーロッパ人による見解を代表するものと考えられる。日本でも太平軍の優勢ぶりと北京の動揺が伝わり、幕末の志士である吉田松陰の思想

形成に大きな影響を与えたことはよく知られている[105]。

なお混乱と厳戒態勢下の北京にあって、もう一つ深刻だったのは民生問題であった。鳳保の上奏によると、彼が綿入りの服を貧民に配給する作業の監督をしたところ、貧民の数は例年よりも多く、とくに東北二城では数倍に及んだ。その原因は豊かな者たちが北京から避難し、働き口を失った下層民の生計が困難になったためで、彼らは流民となって外地へ出るか、凍えて飢え死にするかの選択を迫られたという。また戸部は膨大な軍事費支出を支えるべく、毎月北京の家賃収入に対して「房租」なる付加税を課した。鳳保はこの税の徴収に立ち会ったが、多くの住民は負担に耐えられなかったと述べている[106]。

この北京の房租について、1854 年 2 月に戸部尚書羅惇衍も「小さな利益によって人心を失ってはならない」と述べてその廃止を訴えた。彼によると北京の軍事費は毎月 48 万両かかるが、房租の収入は約 2 万 5,000 両にしかならない。しかもこの税の徴収が容易で、民衆の生活に影響が出ないのならともかく、現在満洲、モンゴル八旗および漢人の苦痛は数え切れないと指摘して次のように述べている

> 北京の衣食は大半を各地からの流通に仰いでおり、次が財産の有無で、房租の多寡が基準となっている。以前は百貨が集まったが、最近は賊に阻まれて、商人はちりぢりとなってしまい、徒食する者が次第に増えた。およそ小商人や手工業者は糊口なきことを恐れている。房租に頼っている者は三家のうち一家に満たず、空き屋があっても［入居者を入れて］補うことが出来ない。あらゆる貧民は老弱、女子供を問わず、飢えや寒さに泣き叫ぶ声は耳に絶えることがない。壮年の男でも仕事がなく、空腹のあまり生気を失っている……。房租納入の時になると、家に金がない者は親戚に借りるが、借りる当てのない者は財産を質入れする。さらに財産のない者は八方手を尽くして準備するが、家は破産し、恨み嘆きは道にあふれ、笞打たれたうめき声は街角に響きわたる。もし今後も毎月徴収を続ければ、苦しみはさらに激しいものとなる。[107]

ここからは北京の経済活動が破綻の危機に瀕し、しわ寄せが下層民に集中したことが窺われる。またその結果発生した難民対策も清朝にとって頭の痛い問題であった。10 月に通州、昌平州や北京広安門外の藍甸廠で難民の活動が報告されると、清朝は歩軍統領衙門や順天府に調査を命じると共に、漕米の運送で生計を立てていた通州の「游民」を団練に編入し、失業した彼らが不穏な行動に走るのを未然に防ぐように命じている[108]。

2. 北伐軍の天津進攻と独流鎮・静海県の籠城戦

(a) 太平軍の天津郊外到達および華北民衆との関係

さて深州を占領した太平軍は、兵士の休息と部隊の再編のために 14 日間ここに駐屯した。10 月 13 日に保定に着いた勝保は直隷総督桂良と面談のうえ[109]、16 日に深州の北にあ

る西午村に進出した。このとき太平軍は広西人の女性を男装させて北京の動静を探らせるなど、なお北進の構えを見せていたが[110]、包囲網が形成されるのを嫌って 13 日、19 日、21 日に清軍と交戦した[111]。また 22 日夜には暴風に紛れて深州の東へ脱出した[112]。以後太平軍は 29 日に先鋒隊が天津郊外の楊柳青に到達するまで、これを追撃する勝保の軍と激しい行軍レースを展開することになる。

まずは太平軍の進撃ぶりを見よう。深州を出た太平軍は 23 日に武強県の小范村に着くと、滏陽河を北上して夕方に献県を占領した[113]。当時河間府から新津県にかけて洪水が発生し、天津に通じる道路が遮断されていたため、太平軍は東南へ進路を変え、25 日に交河県を占領した[114]。翌 26 日に大運河沿いの柏頭鎮に到達した太平軍は船を獲得すると[115]、再び北へ向かって 27 日に滄州を陥落させた。さらに 28 日には青県を占領し[116]、29 日にその主力は静海県城と交通の要所である独流鎮を占領したのである[117]。

これに対して勝保の追撃ははかどらなかった。はじめ彼は咸豊帝から深州で太平軍を殲滅するようにとの指示を受け、準備を進めていた[118]。太平軍が深州を離れると、彼は西凌阿、貴州提督善禄にこれを追撃させ、みずからは太平軍の北進を防ぐために東北へ向かい、24 日に河間府城へ到着した[119]。しかしこの時勝保は太平軍の進路を正確に予想することが出来なかった。もともと勝保は太平軍が直隷に入って間もない 10 月初めの段階で、捕らえたスパイの供述から太平軍の次の攻略目標が天津であるとの情報をつかんでいた[120]。だが彼は 10 月 25 日の上奏で、太平軍は深州までの戦闘でダメージを受けており、天津一帯の水害やその防禦が固いことを考えると、大運河を経由して南へ向かうだろうと予測した。そして太平軍が再び黄河を渡って南方の太平軍と合流しないように、山東巡撫崇恩らに迎撃体制を整えるように要請したのである[121]。

確かにこの頃太平軍の西征軍は湖北、安徽で積極的な動きを見せており、清朝は北伐軍がこれらの部隊と合流し、北京へ進攻するのではないかという危機感を持っていた[122]。ところが太平軍は勝保の予想に反して北上し、滄州陥落の知らせを受けた彼がその進路を阻むべく青県に到着した時には、すでに青県を通過した後だった[123]。太平軍も勝保が後方から追尾するだけで、決戦を挑もうとしないことを嘲笑し、行く先々で「勝保の見送りは無用」と書きつけた立て札を残していったという[124]。

もっとも太平軍が静海県に到達した段階で、勝保の軍は騎兵 400 名、歩兵 1,000 名に過ぎず、攻勢をかけるだけの力を持っていなかった[125]。また勝保は太平軍を積極的に追撃しようとする清軍将校が少ないと述べており、じじつ彼が太平軍を捕捉するために先発させた筈の西凌阿と善禄は「かえって私よりも後になった」[126]という。さらに長く困難な行軍によって兵士たちは疲れきっていた。勝保は次のように指摘している。

> 私は今回深州から逆匪を追撃するにあたり、彼らが長駆北上すれば、後方から追いかけるだけになってしまうと考え、河間から青県への近道を行くなど迅速を期した。だが

その道中は一面水浸しであり、いずれの地方も賊の蹂躙を受けたため、車馬は徴発出来ず、食糧も全くの空になっていた。将兵たちは重い荷物を背負って浅瀬を渡り、空腹のまま道を急ぐなど、その困難は言い尽くせない程だった。

静海県に到着して城外に宿営したが、付近の村々は賊に襲われていなければ、水にやられており、一粒の米、一寸の草も残っていなかった。人馬は食糧も草も絶たれ、今やすでに三日となる……。今回の戦闘で［兵たちは］飢えや寒さ、疲労に苦しみながら、敏捷で勇敢な敵と遭遇した。ひとたび号令が下るや終日戦いを交え、千人余りを倒して万を超える敵を恐れさせた。私は喜びのあまり涙を禁じ得ない。[127]

この上奏文は 11 月 1 日に勝保が静海県城の太平軍と戦った後に書かれたもので、勝利できなかった理由を食糧の不足に求めている。だが脚色された部分を除いても勝保軍が疲弊していたことは間違いなく、給事中呉廷溥は僧格林泌の軍を太平軍弾圧の前面に立て、勝保に暫しの休息を与えるように求めたほどだった[128]。

いっぽうの太平軍はどうであろうか。山西から天津郊外まで比較的有利な戦いを展開した太平軍であるが、この間に住民の虐殺事件を 2 度起こしている。最初は山西平陽府で、龔淦『耕餘瑣聞』によると太平軍が入城した当初は「未だ人を傷つけなかった」。だが 9 月 14 日の戦闘中に、平陽で加わった新兵が抬砲を太平軍の隊列へ向けて発射し、黄巾姿の指揮官を殺害したために、部隊は敗北して数百人が死んだ。すると怒った太平軍は「平陽人は手ごわい連中だと考えて、再び入城すると二万余人を殺した」[129]という。

また陳思伯の回想によれば、平陽の郷勇が撃った砲弾がたまたま太平軍の大旗手に命中すると、林鳳祥は激怒して「この城を破って皆殺しにせよ」と命じた。城外の「客商」たちは投降して殺戮を免れたが、城内では「捜索と虐殺が三日間続き、男女老幼の屍体が枕を並べた。また出発時には火を放ち、城中が灰燼に帰した」[130]と述べている。

2 度目の虐殺が行われたのは直隷滄州であった。元々滄州は満洲八旗の駐屯地で、知州沈如潮と満洲旗営の成守尉である徳成は太平軍が 3–4,000 人程度との報告を受け、4,000 名の兵で迎え撃つことにした。10 月 27 日に彼らは太平軍の先鋒隊と交戦したが、突然火薬を積んだ車が太平軍の工作員によって爆破された。この時太平軍の本隊が姿を見せ、報告をはるかに超える人数に驚いた沈如潮らは城内に退却しようとしたが、太平軍は城門に殺到して中へ攻め込んだ。徳成は市街戦で死亡し、沈如潮も捕らえられて殺された。だが最後まで抵抗する者が多く、太平軍の将兵は「郡県がみな滄州のように官民が必死に防衛したなら、我々もここまで来られなかっただろう」と語ったという。

入城した太平軍は初め殺戮を行わなかったが、点呼を取ったところ死傷者が多いことが明らかになった。すると太平軍は「痛恨して虐殺を命じ、満洲人、漢人、イスラム教徒を合わせて一万人余りを殺した」[131]とある。清朝側の捜査によれば満洲人将兵 1,000 名余りのうち 800 名が殺され、女性の死者は 1,800 名、子供は 480 名に及んだ[132]。

太平天国を民族主義革命と評価した簡又文氏は、滄州の虐殺が「北方最大かつ最も凄惨な災難」であり、挙兵当初の広西全州における虐殺に匹敵する事件であると述べている。また林鳳祥らが一時の憤激にかられて漢族を含む多くの人々を殺害したのは、戦闘による損害が大きかったとはいえ、華北の人々の反感と激しい抵抗を引きおこすことになり、北伐全体の戦局に極めて不利な結果をもたらしたと指摘している[133]。これに対して張守常氏は、直隷に入った太平軍は滄州で初めて本格的な抵抗に遭い、城内でも激しい市街戦が発生したために、結果として双方の死者が増えたと分析している[134]。

実際のところ太平天国は満洲人を「妖魔」と見なして排撃する復古的なナショナリズムを主張し、南京や杭州で満洲人に対する虐殺を行った[135]。また北伐軍も河南帰徳府で「城内の妖兵、妖官は全て殺し、およそ三千人以上を殺した」[136]と報告したように、清朝官吏や清軍兵士に対する徹底した殺戮を行った。天津への進撃途上だった滄州でどの程度組織的な虐殺があったかは不明だが、旗営兵士の死亡率の高さ（8 割）から見ても、太平軍が満洲人将兵とその家族に激しい敵意を向けたことは否定出来ないように思われる。

むろん太平軍はどこでも暴行を働いた訳ではなかった。1853 年 11 月に北伐軍の弾圧方法について上奏した太僕寺卿王茂蔭は、「賊兵の行動は隊列が整っており、統率されていて乱れない。城を奪っても郷村は奪わず、金持ちから掠奪しても貧乏人からは取らない。進撃先ではまず数名を派遣してドラを鳴らし、家々の門を閉じさせ、市場の食べ物を売る店を開かせる。きちんと金を払って交易するため、賊が来ても人々は余り店を閉めようとしない。官兵がいたるところ、全く規律がなく、みだりに掠奪をほしいままにするので、ついに街中が門を閉め、人々も逃げてしまう」[137]と述べている。太平軍の略奪行為が清軍のそれに比べて抑制されたものであるという事実は、華北の人々にも広く知られており、太平軍が洪洞県に進出すると、隣の趙城県の人々は太平軍にラバや米を送り、これを「進貢」と呼んだ。また霍州の城門は降伏の意志を示すために開かれ、紳士たちが食糧を準備して太平軍の到着を待っていたという。勝保はその上奏の中で、山西は兵ばかりか人心まで当てにならないと憤慨している[138]。

だが一方で太平軍は抵抗する者には厳しい報復措置をとった。光緒『深州風土記』によると、10 月 21 日に太平軍の偵察隊 100 騎余りが深州城東南の景蔭村を通りかかった。この時郭洛慶が村人を率いて攻撃すると、翌 22 日に太平軍が再び現れ、村は攻め破られて 100 人以上が死んだ[139]。また命令を拒否したり、批判的言説を唱える者も容赦しなかった。趙州人の王挑は太平軍に従軍を命じられたが、「死んでもお前たち逆賊には従わない」と罵って殺された[140]。武安県の生員だった王英も親子で太平軍に連行されたが、臨洛関で酒に酔い、上官を罵って殺されたという[141]。こうした太平軍の強圧的な態度に対して、華北の人々もおいそれとは従わなかった。陳思伯は次のように述べている

［太平軍が］天津に到達して兵士の数を調べたところ、十万人（太平軍固有の数え方

で、実際は 2万 5,000 人をさす）に満たなかった。なぜなら北の人々は荒々しく、拉致や掠奪をするのは容易でない。一、二人で家を守る者は必ず暗い場所に隠れ、賊が門を入ってくるのを待って、飛び出してきてこれを撃ち殺す。［他の］賊に見つかれば喜んで命を捨て、見つからなければ死体を屋内に隠し、再び元の場所に隠れて次のチャンスを窺う。これを「獲利」と呼ぶが、たとえ死んでも脅されて従うことを望まないという意味であり、その愚かさはかくの如きである。[142]

人々が太平軍の捕虜となることを潔しとせず、ゲリラ的な抵抗をくり返したこと、その結果太平軍が兵力を充分に増やせなかったことがわかる。虐殺事件のきっかけを作った平陽の新兵たちも自分の身体を抬砲と鎖でつながれ、逃げられないようにされたことに反発して指揮官を殺害したという[143]。それは住民との信頼関係を構築する時間と方法を持たないまま、敵中深く電撃的な作戦を続けた軍事行動の代償であった。

なおこの時期清軍に捕らえられた太平軍兵士の供述書は、いかなる人々が軍に参加したのか、太平軍が彼らをどのように管理したかについて貴重な情報を残している。そのうち太平軍参加の経緯については「家の前で脱穀をしていたら、突然長髪賊がやって来て私を連れ去った」[144]「正定府城内へ茶葉を仕入れに行ったところ、城東で長髪賊に出くわし連れ去られた」[145]とあるように、罪を軽減されたいという願いから拉致されたと証言しているものが多い。だが中には太平軍の参加経験をもつ仲間から話を聞き、自ら望んで太平軍の陣営に投じた楊二（直隷通州人）のような例もあった[146]。任県でも数百人が太平軍に加わり、一人も戻らなかったという[147]。

また太平軍の新兵に対する管理について見ると、「賊匪たちは針金で私の左頭に三日月状の焼き印をつけた」「頭に傷痕を作り、髪を剃ってはならないと言った」[148]とあるように、身体に烙印を押したり、長髪姿に変えることでその逃亡を防ごうとした。また「賊目が黒と紅色の丸薬を飯に混ぜて私に食べさせたところ、頭の中が朦朧としてきた」「私に丸薬や薬酒を与え……、やがて心の中がボーッとしてきて、やたらと暴れ回ったが、何人殺したか憶えていない」[149]という証言があり、新兵に丸薬や酒を飲ませて興奮状態にさせ、戦闘に駆り立てていたと考えられる。

さらに驚くべきは王泳汰（直隷雄県人）、馬二雪（直隷新楽県出身のイスラム教徒）の供述で、「賊目は私が使いものになると見て、二人の女をくれたが、私は手をつけなかった」「私が官兵の長槍で右腿にケガをすると、李賊目は私が戦いで手柄を立てたと言って、私に女を一人くれた」[150]と述べている。挙兵時の太平天国が性をタブー視したことは良く知られており、北伐当時の南京では男女を隔離する男館、女館の制度がなお実行されていた[151]。北伐軍が手柄を立てた新兵に褒美として女性を与えたという事実は、新兵を戦闘に参加させないという当初の方針が崩れ、兵数を確保しながら士気を鼓舞するのに苦労していたことを窺わせる。陳思伯は滄州の戦闘後、太平軍兵士が少女たちを強姦しようとしているのを発見

し、これを救ったと述べている[152]。性的な要求を活用しようとする太平軍内の情況から見て、この種の事件が発生したのは偶然ではなかったと言えよう。

ちなみにもう一つ指摘しておくべき点として、太平軍に合流した雑多な反乱集団の存在が挙げられる。その代表は河南、安徽などの捻子で、山東でスパイとして捕らえられた李全らは「捻匪であり、掠奪をして相手を傷つけたため、賊に従って砲をかついで城を攻めた」「銀當（銀の両替を行う質屋）などの店を三度襲撃し、ついで賊に従うこと二ヶ月余り、何回も官兵と戦った」[153]などと述べている。また滄州のイスラム教徒である王二回子に雇われていた郭憬（直隷大成県人）は次のような興味深い証言を残している

> 五月十三日（6 月 19 日）に王二回子は滄州の回匪と私、全部で四、五百人で懐慶府をめざし、途中掠奪を行った。十六日（6 月 22 日）に名前の知らない場所で長髪賊と会合し、千人余りになった。王二回子は逆匪の頭目である褚二から紅布をもらい、私はそれを頭に巻いて目印とした。また以後は頭を剃ってはならぬと命じられ、鎌形の穂先のついた槍を与えられて、彼らと共に戦うことになった。十七日（6 月 23 日）に逆匪頭目の褚二は長髪賊に命じて、私の左肩に鉄で烙印を押した。
>
> 六月初七日（7 月 12 日）に私は賊匪と共に懐慶府の攻撃に加わり、五十日以上攻めたが、占領することができなかった。八月初三日（9 月 5 日）に我々は山西へ入り、初十日（9 月 12 日）に平陽府に至り、官兵と戦った。賊匪は数知れない程の兵民を殺したが、私も槍で官兵三人を殺し、五人にケガをさせた。［平陽］府城を占領すると、我々は城内に寝泊まりし、店や住民の財物を奪った。
>
> 九月初めに我々は直隷深州へ向かい、途中幾つかの城を襲ったが、その名前は覚えていない。のち深州を占領すると、城内に五、六日駐屯し、再び静海県一帯へ向かった。その途中通過した市場で財物を掠奪した。[154]

本稿が検討した太平軍の懐慶脱出から天津郊外までの足跡と、平陽での住民虐殺、太平軍の新兵に対する取り扱いなどを確認することが出来る。王二回子のムスリム反乱集団は太平軍参加後も掠奪を続けたが、太平軍には彼らに再教育を施して、その暴走を抑えるだけの力量を欠いていた。これら投機的な反乱集団の加入は、太平軍の出で立ちを真似て掠奪をくり返した「ニセ太平軍（假装粤匪）」[155]の活動と共に、華北の人々のあいだに太平軍に対する警戒心と敵意を増幅させたのである。

(b) 独流鎮、静海県における籠城戦と太平軍、清軍

さて楊柳青に到着した太平軍の先鋒隊は、10 月 30 日に天津西郊の稍直口を攻撃した。だが太平軍の天津攻撃は早くから予想されていたため、長蘆塩政の文謙らは在籍紳士で前浙江巡撫の梁寶常らの協力を得て、義勇 2,000 名、壮勇 4,000 名の編制と訓練に努めていた[156]。

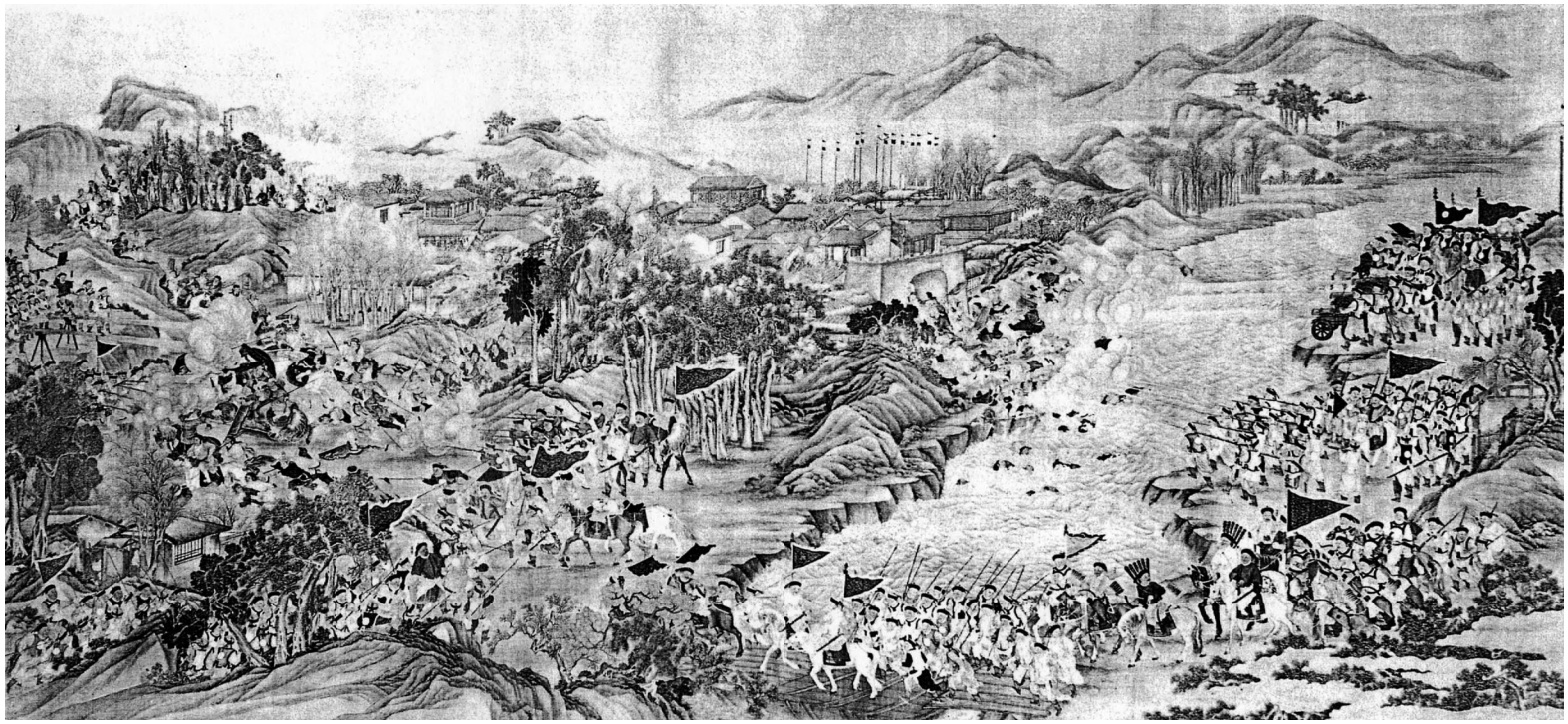
また「邑紳」で塩商の張錦文は小稍直口の防禦工事を進め、囚人 1,000 名を義勇として活用すると共に、「賊を一人殺せば銭一百緡、生きた賊を捕らえた者には銭二百緡」という高額の賞金を約束して兵勇を激励した[157]。さらに天津一帯は 9 月 2 日の大雨で堤防が決壊し、城の西南は水に浸かって自然の要害となっていた。はたして太平軍は苦戦し、伏兵として配置された「雁戸（排槍）」と呼ばれるカモ取り用の小舟を渡し船と思いこみ、接近したところ一斉射撃を受けて敗退した[158]。以後太平軍は天津府城を攻撃せず、独流鎮と静海県城に土城を築いて3ヶ月にわたる籠城戦を行うことになった。

北伐軍はなぜ天津郊外に長く留まったのか？――これは太平天国の北伐史における最大の謎であり、多くの憶測を生んできた。なかでもユニークなのは陳思伯『復生録』で、太平軍による天津攻撃の目的が「夷船」との共同作戦にあったと主張している。彼によると、1853 年 4 月に南京を訪問したイギリス公使 S. G. Bonham は、洪秀全と天津攻撃の期日を申し合わせた。8 月に外国船は天津に到着したが、武器を隠し持っていることが発覚して退出したために、太平軍と共同歩調が取れなかったという[159]。

当時の太平天国はキリスト教世界であるヨーロッパ諸国に対して「わが天兵を助けて妖敵を殲滅するのを手伝うのも、今まで通り商業を営むのも自由である。なんじらが我々と共に天王につかえ、功績をたてて、神の深い恩に答えることを深く望む」[160] と述べたように、自分たちの天下統一事業を援助してほしいという期待感を表明していた。だがイギリスは太平天国と清朝の戦争に対して中立を表明し、Bonham 自身も太平天国に宛てた書簡の中で「我々がいま中国でイギリスの汽船を貸し出して、戦闘を助長することは絶対にあり得ない」[161] と述べている。陳思伯は北伐直前に Bonham 一行を目撃し、外国船の威力についてもある程度知っていたが、彼は外国船との連携失敗という理由を与えることで、太平軍の不可解な戦略について自らを納得させようとしたのかも知れない。

現在見ることの出来る史料の中で、この籠城戦の目的について直接言及したのは北伐失敗後に捕らえられた李開芳の供述である。彼は「[洪秀全は] 南京に着いた後は動くことを望まず、我々に黄河を越えて天津に着いたら報告せよ、さすれば再び兵を送ると言った」[162] と述べており、これによれば太平軍が天津付近に留まったのは援軍の到着を待つためで、南京出発の時点で定められた戦略だったことになる。

もっとも太平軍が天津付近に到達した時点では、間髪を入れずに北京へ進撃する可能性もあった。静海県で捕らえられた太平軍兵士の王自發（南京人）は「我々は元々天津を占領し、数日間休息したら、隊を分けて北進するつもりだった。だが図らずも天津の兵勇に撃退され、静海、独流を占拠した」[163] と述べている。また太平軍内に潜入した清軍の斥候も「賊たちから聞いた話では、二十八日（10 月 30 日）に天津を攻め、来月に北京に至るとのことだった」[164] と報告している。さらに楊長兒（直隷武邑県人）の供述によると、彼は北伐軍が山西で活動していた 9 月下旬に太平軍の工作員によって雇われ、ニセの清兵を装って静海県と滄州の間を往復した。その中には「南京から動員された兵」[165] もいたといい、数こそ少



攻剿独流戦図（1853 年）
（『攻辨粤匪戦図』光緒十二年 (1886) 慶寛等奉勅絵図、東洋文庫 II-1-200）

ないものの援軍がひそかに到着していたことがわかる。

また天津郊外を占拠するという太平軍の戦略も、見方によっては一定の合理性を持っていた。11 月末に工科掌印給事中の汪元芳は「天下安危の大局は全てこの一、二ヶ月にあり」と述べて次のような分析を行った。太平軍が独流、静海で籠城しているのは「固守して援軍を待っている」のであり、決して勢いが衰えた訳ではない。もし清軍の弾圧が遅れれば、北伐軍は凍結した河川を歩いて各地に進出することが可能となり、河南、安徽の西征軍と呼応すれば戦局は太平軍にとって有利となる。また大運河が使えない以上、江南で集められる漕米は上海経由で海運せざるを得ないが、その輸送が滞れば北京への影響は深刻なものとなる[166]。つまり天津の太平軍は北京の喉元をおさえているのと同じで、経済が破綻しかかっている北京にとって猶予ならない事態だというのである[167]。

確かに 11 月初めに涿州から天津北部へ到着した僧格林泌は、現在は水害の影響で太平軍が西北、西南に進出する可能性はないが、河川が凍結すれば移動が可能となるため、攻撃を急ぐ必要があると指摘した[168]。勝保も独流鎮の太平軍が陣地内で草鞋や釘鞋を製作しており、河面の凍結を待って移動するに違いないと報じている[169]。さらに太平軍が天津近郊から撤退する直前の 1854 年 1 月に清軍に捕らえられた王二格（直隷良郷県人）らは、清朝官員を装って永定河沿いの固安県方面を偵察するように命じられた[170]。王自發も「現在頭目たちは会議をして、天津を破れないからには、王家口を攻めた後に保定へ向かい、さらに北犯しようと考えた」[171] と述べており、太平軍が籠城戦のあいだも北京攻略の可能性を諦めず、脱出のタイミングと進撃方向を探っていたことは間違いない。

ここで問題となるのが、林鳳祥らが援軍を要請した時期とその理由、それに対する南京側の反応である。李喜兒（直隷遷安県人）は「賊目の偽大王は天津で敗北した後、四人の女賊を一千余人と共に南京へ送った」[172] とあるように、援軍の要請は天津での敗戦後に出されたと述べている。また曹大徳（太平軍の軍帥）らは「賊首は静海に籠城してから、次々と賊目を南路へ派遣して応援を求めた。その数はすでに三、四十人に上るが、南の賊からの回答は本年二月（1854 年 3 月）の春に賊党を遣わして北に向かわせるというものだった」[173] と語っており、籠城戦の開始と共に援軍要請がしばしば送られたにもかかわらず、南京側の反応が極めて鈍かったことが窺われる。

実際のところ稍直口の戦いにおける太平軍の死者は 500 名程度で、それほど大きな打撃を受けた訳ではなかった[174]。あるいは懐慶攻防戦における失敗の教訓から、林鳳祥らが城郭攻撃に自信を失っていたとしても、なぜここまで北京進攻を見合わせる必要があったのだろうか？　あるいは南京からの援軍はなぜもっと迅速に北上しなかったのか？

これらの疑問を解く一つの手がかりは、1853 年 6 月から北京で情報活動を行った李丙銀（湖北黄陂県人）の供述であろう。彼は「賊目」張振宗によって「出兵の知らせを探る」ために北京へ派遣され、騾馬市大街にある郝南松の店に住んで、「同党」の林如寶（湖北武昌府人）、黄誠徳（湖北漢口人）、葛一貴（江南人）と共に「常に外へ出かけては軍情を探っ

た」という。その結果について李丙銀は次のように述べている

［清軍が］懐慶へ兵を送って［太平軍を］鎮圧するとの知らせを聞き、黄誠徳に南へ戻って報告させた。また北京の動員した兵力が大変多いことをつきとめると、林如寶は彼に揚州城内へ行って、王偽相に「決して軽々しく北進するな、南京に行って相談してから［援軍の派遣を］決定せよ」との伝言を伝えるように命じた。[175]

ここではまず清朝による懐慶救援軍の派遣が南京へ伝えられ、続いて北京の防衛力が高く、軽率に攻撃しないようにとの報告が送られたことがわかる。むろん李丙銀は天津一帯の水害を避けるべく西へ向かい、沙河県で逮捕されたため、彼の情報は南京や北伐軍の陣営には届かなかった。だが北京に潜伏した太平軍の密偵は彼らだけではなかった筈であり、同様の報告が届けられたか、少なくとも林鳳祥や南京の太平天国首脳が北京の清軍兵力を過大に評価するようになった可能性は充分にある。それは北伐軍の進撃スピードを鈍らせただけでなく、援軍の出発時期を遅らせることにもなったと考えられる。つまり僧格林泌らが北京の人々の動揺を防ぐために行った宣伝工作が、結果として太平軍の過度に慎重な姿勢を生み出すことになったのである。

ところで独流鎮、静海県に籠城した太平軍の実態はいかなるものであっただろうか。王自發は次のように語っている。

我々は蒲口（南京対岸の地名）を出発した時は四万余人いたが、途中死傷したり、行方不明になったり、逃亡した者が約一万人いた。現在はなお三万人余りで、九軍に分かれており、一軍ごとに火薬二千斤余りを持っている。独流にはおよそ一万七、八千人、静海には一万三、四千人がいる。我々は途中硫黄を見つければ、手分けして持ってきた。現在火薬が足りなくなり、硝石を煎じて炭を焼き、毎日一百斤の火薬を作っている。我々は元々大砲を四十門余り持っていたが、どれも二百七、八十斤のものだった。聞くところでは独流鎮の戦いで三千斤余りの大砲を三門、五百斤の大砲を五門と抬鎗二十余丁を手に入れたとのことだ……。

両広、両湖出身の長髪の者は老兄弟と呼び、生死を同じくすることを誓って、決して互いに離れようとしない。[176]

ここで王自發は天津到達時の太平軍が 3 万人程度の兵力を持ち、独流鎮に 1 万 7–8,000 人、静海県に 1 万 3–4,000 人いたと述べている。張興保（湖南道州人）も「現在独流の賊は……、広西の長髪賊が約一、二百人、湖南人が三、四百人いる」と述べており、彼らは「老兄弟」として固く結束していたという。また太平軍は小型の大砲を 40 門ほど持ち、他に戦闘で捕獲した大砲もあったが、「城を守る時は大砲を使うが、攻撃の時は使わなかった」と

あるように、火薬の不足もあって余り大砲は使わなかった。さらに張興保によると騎兵隊は300 騎ほどで、兵士は麦から麺を作って食べ、馬にはコーリャンがらを与えていた。林鳳祥らは二つの龍を刺繍した風帽をかぶり、紅袍に黄馬褂を着ていたが、一般の兵士は戦闘時の行動が不便になるため「長い服を着ることを許さなかった」[177] という。なお独流鎮と静海県の距離は 9 キロほどあったが、途中に連絡を確保するための拠点が 10 ヶ所置かれていた。太平軍が捕獲した物資はみな独流鎮に運び込まれ、ここから船を用いて静海県へ運ばれたという [178]。

これに対して清軍の足並みはまたも揃わなかった。太平軍を追撃してきた勝保は一度天津府城へ入り、天津の清軍、壮勇と再び出撃して独流鎮に近い良王荘に陣を敷いた。また西凌阿と善禄は静海県城の東南に布陣し [179]、河間から前進してきた欽差倉場侍郎慶祺も独流鎮の西北から太平軍を攻撃した [180]。だが 11 月 6 日に大清河の北岸にある王慶坨に到着した僧格林泌は、「北面の守り」の重要性を指摘して動こうとしなかった。

北伐当時の清軍を代表する司令官だった勝保と僧格林泌の反目は、副都統達洪阿の率いる精鋭 1,700 名の活用方法から表面化した。元々達洪阿の軍は僧格林泌が深州救援のために派遣した部隊であったが、太平軍の東進によって勝保と合流出来ず、11 月 7 日にようやく勝保の陣地へ到着した時には 700 名の兵しか連れていなかった。また僧格林泌が騎兵隊を前線へ送らないことに怒った勝保は、僧格林泌が達洪阿の兵を迅速に前進させるように命じた咸豊帝の命令に違反していると訴えた [181]。さらに勝保は「一国三公」すなわち自分と僧格林泌、慶祺が並び立つ現在の状態は、指揮系統の混乱を招くと述べて欽差大臣である自分に権限を集中させるように求めた [182]。

そもそも僧格林泌の登場は、太平軍の鎮圧が進まないことに焦る勝保にとって脅威に外ならなかった。咸豊帝もその点はわきまえており、勝保への上諭で彼を罷免するつもりはないと明言した [183]。だが 2 人の対立は鳳保が「勝保と僧格林泌は意見が合わず、弾圧もはかどっていない」[184] と上奏したように周知の事実となった。歩軍統領載銓も 2 人が功名を争っていると述べたうえで、純粋で性急な僧格林泌は兵糧不足などの現実について認識不足で、結果として無理な要求をしてしまうのであり、咸豊帝に 2 人を公平に扱い、安心させる必要があると提言している [185]。

初めのうち咸豊帝は、「（僧格林泌は）いまだ交戦せず、空しく多くの兵を擁している」[186] と述べるなど勝保に対してより同情的で、僧格林泌への上諭で部下の中にはいたずらに議論を好み、心が純粋でない者がおり、彼らに騙されて公平さを欠いてはならぬと諭した程だった [187]。また咸豊帝は勝保に太平軍の鎮圧を任せたからには、「朕は断じて遥制しない」[188] と宣言したが、実際には木城のそばに高い砲台を築いて攻撃するか、独流鎮と静海県の間を分断する形で陣地を構築せよと命じるなど細かな指示を与えていた [189]。そして北京の危機を訴えた汪元芳の上奏に動揺した咸豊帝は、12 月 1 日に「十日以内に［太平軍を］全て撃滅し、偽丞相の林逆［鳳祥］らを捕らえて北京へ送れ」「これ以上時間を無駄に費やすなら、

国法がどうして容赦できようか！」[190] との硃批を記し、勝保に対して期限を切って太平軍を殲滅するように厳命した。

これに受けた勝保は天津、北京から「武成永固大炮」「無敵炮」[191] などの巨砲を取り寄せ、執拗に太平軍陣地に攻撃を加えた。だが「該逆（太平軍）は潜匿し、誘っても出てこない」「該逆は運河を深く掘ったため、一面の水で戦える場所が殆どない……。兵勇は勇気を奮って前進し、濠辺から土や草でこれを埋めようとするが、悉く陣地内の砲撃によって負傷してしまい、このため攻撃はなかなか成功しない」[192] とあるように、厚い防禦に阻まれて戦況は膠着状態が続いた。

また苦戦する勝保に対して、彼の兵が太平軍陣地に突入した天津の壮勇を見殺しにしたとか、勝保の上奏は脚色ばかりで内容がないといった告発が相次いだ[193]。勝保はこれらの批判について「局外の傍観者が私に責任を負わせた」中傷であると反論したが、咸豊帝に自分を処罰することで彼らの口をふさぎ、別に「親信の重臣を簡派」することで現在の「苦哀」から解放してほしいと求めた[194]。

12 月 23 日に清軍は独流鎮の太平軍陣地に攻撃をかけ、反撃を受けて副都統佟鑑と壮勇を率いていた天津県知県の謝子澄が戦死した[195]。この日勝保は偵察のため不在であったが、報告を受けた清朝は司令官でありながら半日も戦場を離れ、軽率な攻撃を止められなかった勝保を四級の降格処分とし、花翎を取りあげて「軽い罰」を与えた[196]。

このように清軍の攻撃は手詰まり状態が続いたが、籠城する太平軍も次の行動に移ることが出来なかった。この間に直隷各地で団練の結成が進み、太平軍に呼応した反乱勢力も個別に撃破されていった[197]。そして比較的有利だった形勢は逆転し始めたのである。

おわりに

本稿は山西から天津郊外へ至る太平天国北伐の歴史を再検討した。その結果、まず太平軍の山西、直隷進出に伴う哈芬と訥爾經額の解任劇は、省を単位とした漢人出身の地方エリートが台頭し、清朝も彼らの要求を無視しては地方統治を行えなくなったことを意味していた。また北伐軍の深州占領によって北京にパニックが広がり、清朝は取締りの強化による秩序の維持に追われたが、北京を脱出する官吏・商人の増加によって経済は大きな打撃を受け、そのしわ寄せが下層民に集中していたことが明らかになった。

いっぽう太平軍に目を向けた時、その迅速な行動は清軍の追撃を許さなかったが、それは太平軍が華北民衆と接点を持つことを困難にさせ、結果として 2 度の住民虐殺事件を引きおこした。また天津郊外に到達した太平軍は籠城戦を行って南京からの援軍を待ったが、林鳳祥らおよび南京の太平天国首脳が北京進攻に慎重となった背景には、僧格林泌らの宣伝に影響を受けて北京の防衛力を過大評価した太平軍密偵たちの報告があった。そして膠着した戦況は清軍、太平軍の双方を消耗させ、地方レヴェルでの防衛力強化によって北伐が勝利する可能性も奪っていったのである。

注

1) 菊池秀明「太平天国の北伐前期における諸問題——南京から懐慶まで」国際基督教大学社会科学研究所編『社会科学ジャーナル』55 号、2005 年。
2) 簡又文『太平天国全史』香港猛進書屋、1962 年。
3) 張守常『太平天国北伐史』(張守常・朱哲芳『太平天国北伐・西征史』広西人民出版社、1997 年所収)。張守常『太平軍北伐叢稿』齊魯書社、1999 年。
4) 堀田伊八郎「太平天国の北征軍について—その問題点の一考察」『東洋史研究』36 巻 1 号、1977 年。
5) 吉澤誠一郎「天津団練考」『東洋学報』78 巻 1 号、1996 年(『天津の近代—清末都市における政治文化と社会統合』名古屋大学出版会、2002 年、38 頁所収)。
6) 中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』(以下『鎮圧』と略記)第 6 輯–17 輯、1992 年–1995 年が太平天国の北伐と直接関連している。
7) 中国社会科学院近代史研究所編『太平軍北伐資料選編』斉魯書社、1984 年。
8) 台湾故宮博物院編『宮中檔咸豊朝奏摺』第 6 輯–第 12 輯(未公刊、台湾故宮博物院所蔵)。
9) 郭夢齡奏、咸豊三年八月初五日『鎮圧』9、115 頁。哈芬奏、咸豊三年八月初六日『鎮圧』9、122 頁。
10) 陳思伯『復生録』(中国近代史資料叢刊続編『太平天国』4、広西師範大学出版社、2004 年、346 頁)。
11) 哈芬奏、咸豊三年八月十一日『鎮圧』9、192 頁によると、垣曲県の要所には河東監掣同知魯鴻疇がいたが、太平軍の接近を知って絳県へ逃亡した。また垣曲県の守備に当たっていた署参将の玉恒も逃亡したという。
12) 哈芬奏、咸豊三年八月初九日『鎮圧』9、163 頁。光緒『垣曲県志』巻 4、兵防。
13) 郭夢齡奏、咸豊三年八月初九日『鎮圧』9、167 頁。光緒『絳県志』巻 12、祥異。
14) 郭夢齡奏、咸豊三年八月初六日『鎮圧』9、131 頁。勝保奏、咸豊三年八月十五日『鎮圧』9、249 頁。
15) 郭夢齡奏、咸豊三年八月十一日『鎮圧』9、192 頁。勝保奏、咸豊三年八月十五日『鎮圧』9、249 頁。
16) 竇文藻『癸丑兵燹記』(民国『臨汾県志』巻 5、藝文類)。
17) 勝保奏、咸豊三年八月十五日『鎮圧』9、249 頁。民国『洪洞県志』巻 18、雑記志、兵事。
18) 勝保奏、咸豊三年八月十八日『鎮圧』9、324 頁。竇文藻『癸丑兵燹記』。
19) 托明阿奏、咸豊三年八月二十一日『鎮圧』9、369 頁。民国『屯留県志補記』兵事録(『太平軍北伐資料選編』355 頁)。
20) 郭夢齡奏、咸豊三年八月二十八日『鎮圧』9、479, 480 頁。
21) 郭夢齡奏、咸豊三年八月三十日『鎮圧』9、498 頁。陸應穀奏、咸豊三年九月初一日『鎮圧』9、515 頁。光緒『黎城県続志』巻 1、紀事。
22) 陸應穀奏、咸豊三年九月初九日『鎮圧』10、28 頁。訥爾經額奏、咸豊三年八月二十八日『鎮圧』9、474 頁。
23) 勝保奏、咸豊三年八月初四日『鎮圧』9、111 頁。
24) 竇文藻『癸丑兵燹記』。勝保奏、咸豊三年八月十五日『鎮圧』9、249 頁。郭夢齡奏、咸豊三年八

月二十五日『鎮圧』9、438 頁。托明阿奏、咸豊三年八月二十一日『鎮圧』9、369 頁。

25) 哈芬奏、咸豊三年八月初九日『鎮圧』9、165 頁。

26) 申兆奎「粤匪過境約略」(光緒『潞城県志』巻 4、雑述)。

27) 訥爾經額奏、咸豊三年八月二十九日『鎮圧』9、488 頁。

28) 哈芬奏、咸豊三年八月初九日『鎮圧』9、163 頁。

29) 哈芬奏、咸豊三年八月初九日『鎮圧』9、163, 164 頁。また瑞昌奏、咸豊三年十月初一日『鎮圧』10、359 頁も山西洪洞県から山東濮州へ偵察に派遣された「奸細」楊興ら 14 名の処罰について報じている。

30) 勝保奏、咸豊三年八月十五日『鎮圧』9、249 頁。むろんこの上奏は、勝保の追撃が遅いとする哈芬の批判(哈芬奏、咸豊三年八月十一日『鎮圧』9、190 頁)に対する反論の意味も含まれていた。

31) 郭夢齡奏、咸豊三年八月初五日『鎮圧』9、115 頁。

32) 哈芬奏、咸豊三年八月初二日『鎮圧』9、93 頁。軍機大臣、咸豊三年八月初八日『鎮圧』9、149 頁。

33) なお勝保は 1854 年に給事中毛鴻賓から「年少資輕」といった告発を受けた(毛鴻賓奏、咸豊四年閏七月二十七日、中国第一歴史檔案館編『清代檔案史料叢編』5、中華書局、213 頁)。後述する参賛大臣僧格林泌、山東巡撫張亮基らとの対立と並んで、こうした彼の率直さが当時の中国官界に波紋を投げた可能性は否定できない。

34) 哈芬奏、咸豊三年八月初六日『鎮圧』9、122 頁。

35) 哈芬奏、咸豊三年八月十一日『鎮圧』9、191 頁。

36) 訥爾經額奏、咸豊三年八月十一日『鎮圧』9、188 頁。

37) 郭夢齡奏、咸豊三年八月十一日『鎮圧』9、191 頁。

38) 諭内閣、咸豊三年八月十六日『鎮圧』9、274 頁。なお哈芬解任の理由は「束手無策」「調度乖方、畏葸無能」であった。また哈芬が兵 100 名で北京へ通じる要所を警備すると報じたところ、咸豊帝は「汝何無壯志如是」との硃批を記して立腹し、これが解任の直接のきっかけになった(哈芬奏、咸豊三年八月十一日『鎮圧』9、191 頁)。

39) 郭夢齡奏、咸豊三年八月十七日『鎮圧』9、307 頁。

40) 賈克慎等奏、咸豊三年八月十二日『鎮圧』9、210 頁。ちなみにこの上奏は徐繼畬が書いたが、彼が「革職廢員」のために賈克慎らの名義で上奏したという(張守常『太平天国北伐史』六八頁。白清才等編『徐繼畬集』3、山西高校聯合出版社、1995 年、926 頁)。

41) 賈克慎等奏、咸豊三年八月十七日『鎮圧』9、309 頁。

42) 已革山西巡撫哈芬供詞、奕訢奏、咸豊三年十月十一日『鎮圧』10、469 頁。

43) 赴任後の哈芬は大学士祁寯藻など多くの官員、紳士、商人から寄付を集め、8 月 1 日の上奏ではその総額が 162 万両以上に上ると報告した。またそのリストを皇帝や戸部へ送って評定を求めると共に、「將各捐商姓名銀數榜示通衢、俾衆咸知、以杜弊端」とあるように不正の発生を防ごうとしたという(哈芬奏、咸豊三年五月二十五日『鎮圧』7、342 頁。同奏、咸豊三年六月二十七日・七月初八日『宮中珈咸豊朝奏摺』9、222, 356 頁)。

44) 哈芬奏、咸豊三年六月初八日『宮中珈咸豊朝奏摺』8、830 頁。なお郭夢齡奏、咸豊二年十一月十四日、同書 6、260 頁によると、哈芬の赴任以前に山西の「紳商庶人」から 50 万 6,780 両の

寄付が集まり、「從優議叙」するよう求めたところ、「戸部覈議議奏」との硃批を得たとある。或いはこの件について処理が遅れていたと見られる。いずれにせよ哈芬の告発された原因は、彼個人の失策というよりも清朝統治のあり方に問題点にあったことと見るべきで、じじつ 1852 年には陵川県で、1854 年からは洪洞県、陽城県など各地で抗糧暴動が発生した。

45) 菊池秀明「太平天国前夜の広西における社会変容——台湾故宮博物院所蔵の檔案史料を中心とした分析」（国際基督教大学アジア文化研究所『アジア文化研究』32 号、2006 年）における富綸（護理広西巡撫）の事例を参照のこと。

46) 郭夢齡奏、咸豊三年八月初九日『鎮圧』9、166 頁によると、彼は哈芬から太原から 1,000 名の兵丁・壮勇を韓侯嶺へ派遣するように命じられた。だが徐繼畬らは太原の兵力が 3,300 名と少なく、これ以上の兵を前線へ送れば住民にパニックが起きると訴えた。そして郭夢齡は「臣目擊情形、深堪憫惻、若置紳民於不顧、將就撫臣、勢必一二日間逃避一空」と述べたうえで、省都の重要性を強調して、澤州方面の官兵を韓侯嶺へ送るように求めた。

47) 哈芬奏、咸豊三年六月初八日『鎮圧』7、540 頁。

48) 哈芬奏、咸豊三年六月二十七日『宮中珈咸豊朝奏摺』9、221 頁。ここで哈芬は徐繼畬を「品望素著」、賈克慎らを「才識優長、辦事老練」と高く評価している。

49) その後郭夢齡は勝保の率いる四川兵を太原の防衛に当てるように求め、咸豊帝から「汝等怎只知顧山西、畿輔重地漫不戒意、何喪良若是？豈欲朕執刃臨汝頭乎？」と厳しく叱責された（郭夢齡奏、咸豊三年八月三十日『鎮圧』9、498 頁の硃批）。また哈芬の処分について、咸豊帝は巡撫である彼が省境防衛に失敗しただけでなく、非常時に部下と争ったのは大局を見失った狭い了見だと指摘した。また郭夢齡に陥れられたと主張するのは話にならないと述べたうえで、部下が呼びかけに応じなかったのは日頃の統率が出来ていなかった結果であると批判した。そして哈芬を流刑として流刑地に送り勤務させるように命じた（内閣、咸豊三年十月十一日『鎮圧』10、473 頁）。

50) 啓文奏、咸豊三年八月十七日『鎮圧』9、302 頁。

51) 軍機大臣、咸豊三年八月二十一日『鎮圧』9、359 頁。もっとも咸豊帝はこの段階で訥爾經額に見切りをつけた訳ではなく、八月二十二日の硃批では彼が直隷の防衛に成功すれば、功績は勝保に勝ると激励している（訥爾經額奏、咸豊三年八月十九日『鎮圧』9、342 頁）。

52) 薛福成『庸庵筆記』巻一、訥相臨洛關之敗（江蘇人民出版社版、1983 年、4 頁）。

53) 已革直隷總督訥爾經額親供之一・同親供之二、咸豊三年十月十三日『鎮圧』10、491, 492 頁。

54) 内閣、咸豊三年九月初一日『鎮圧』9、508 頁。

55) 訥爾經額の供述（十月十三日）によると、彼は太平軍が兵站基地である広平を攻撃する可能性があり、衛輝から行軍中の吉林、盛京兵と連絡が取りやすいように広平に赴いた。ところが汲県、淇県で車馬の調達がうまくいかず、五日遅れの 10 月 1 日にようやく 2,000 名が集まった。また残りは訥爾經額が率いて南和、冀州方面へ向かう予定であったが、なかなか出発できなかった。結局訥爾經額は直隷総督を解任された翌日の 10 月 8 日に広平を発ったが、太平軍の進撃スピードは速く追いつかなかったという（已革直隷總督訥爾經額親供之二『鎮圧』10、492 頁）。

56) 宋晉奏、咸豊三年九月初六日『鎮圧』9、596 頁。

57) 何彤雲奏、咸豊三年九月初八日『鎮圧』9、632 頁。

58) 内閣、咸豊三年九月初八日『鎮圧』9、634 頁。この日は後述のように太平軍が定州に進出した

との誤報が朝廷に届いた日であった。また勝保は訥爾經額に対して同情的な立場を取り、解任後の訥爾經額親子に直隷の団練結成に尽力させるように進言したが認められなかった（勝保奏、咸豊三年九月十七日『鎮圧』10、190 頁。軍機大臣、咸豊三年九月十八日『鎮圧』10、205 頁）。なおこの日理藩院尚書の恩華も何彤雲から「無用之將」との批判を浴び、革職拏問のうえ軍を勝保に統率させるようにとの命令を受けている（内閣、九月初八日『鎮圧』9、634 頁）。

59) 『清史稿』巻 392、列伝 179、訥爾經額（中華書局版、1977 年、11748 頁）。

60) 内閣、咸豊三年十月十七日『鎮圧』10、554 頁。その後訥爾經額は処刑される予定であったが、北伐軍が敗退すると減刑されて「遣戍軍臺」となった。さらに六品頂戴を与えられて陵墓の守護を命じられ、四五品京堂候補となったが、1857 年に死去した（『清史稿』巻 392、訥爾經額伝）。

61) 訥爾經額奏、咸豊三年九月初二日・九月初九日『鎮圧』9、535 頁。同書 10、24 頁。桂良奏、咸豊三年九月初三日・九月初四日『鎮圧』9、550, 561 頁。宣統『任県志』巻 7、紀事、寇乱。同治『奕城県志』巻 9、職官志、宦績。

62) 桂良奏、咸豊三年九月初六日『鎮圧』9、601 頁。訥爾經額奏、咸豊三年九月初九日『鎮圧』10、24 頁。

63) 勝保奏、咸豊三年九月初九日『鎮圧』10、19 頁。なお清朝も滹沱河の戦略的な重要性を指摘し、警備の強化を命じていた（軍機大臣、咸豊三年九月初四日『鎮圧』9、554, 556 頁）。また勝保は太平軍が西凌阿、經文岱の攻撃によって大きな損害を出したと報じたが、陳思伯『復生録』は徒歩で渡河したために川の氷で足が傷つき、出血によって苦痛をもたらしたと回想している（続編『太平天国』4、346 頁）。

64) 民国『晋州志料』巻下、人物志・故事志（『太平軍北伐資料選編』411 頁）。

65) 桂良奏、咸豊三年九月初九日『鎮圧』10、21 頁。

66) 龔淦『耕余瑣聞』丙集（『太平軍北伐資料選編』377 頁）。

67) 孫廷棟爲前往河間沿途所探情形事給巡防処稟文、咸豊三年九月十七日『鎮圧』10、203 頁。諭内閣、咸豊三年九月二十日、『鎮圧』10、216 頁。

68) 張集馨奏、咸豊三年九月二十七日『鎮圧』10、314 頁。

69) 勝保奏、咸豊三年九月初三日・初六日『鎮圧』9、545, 598頁。

70) 勝保奏、咸豊三年九月初九日『鎮圧』10、19 頁。

71) 桂良奏、咸豊三年九月初七日、軍機処奏摺録副、農民運動類、太平天国項、8457 巻 54 号（中国第一歴史檔案館蔵）。

72) 勝保奏、咸豊三年九月十一日『鎮圧』10、101 頁。

73) 廉兆綸「致勝克齋都統保」九月十一日、『深柳堂集』巻 2、書札（『太平軍北伐資料選編』503 頁）。

74) 軍機大臣、咸豊三年九月初八日『鎮圧』9、637, 638 頁。

75) 内閣、咸豊三年九月初九日『鎮圧』10、14 頁。

76) 文祥「文文忠公自訂年譜」、『文文忠公事略』巻二（『太平軍北伐資料選編』548 頁）。

77) 孫銘恩「請禁銭肆連日關閉疏」、咸豊三年二月、『孫文節公遺稿』巻 2（『太平軍北伐史料選編』528 頁）。

78) 李汝昭『鏡山野史』（中国近代史資料叢刊『太平天国』3、神州国光社、1955 年、6 頁）。

79) 鳳保奏陳都城軍備未厳民生日蹙摺、咸豊三年十二月末奏、咸豊四年二月二十五日發抄（「憶昭樓

時事彙編」、太平天国博物館編『太平天国史料叢編簡輯』第五輯、中華書局、1963 年、348 頁)。

80) 柏葰等代奏編修蕭培元條陳軍務摺、咸豊三年九月初七日『鎮圧』10、185 頁。

81) 曹樹基『中国人口史』第五巻、清時期、復旦大学出版社、2001 年、331 頁。

82) 諭内閣、咸豊三年五月十八日『鎮圧』7、217 頁。

83) 諭内閣、咸豊三年六月十九日『鎮圧』7、240 頁。

84) 花沙納等奏、咸豊三年五月初六日『宮中檔咸豊朝奏摺』8、437 頁。

85) 僧格林泌奏・附件安定民心告示一件、咸豊三年九月初七日『宮中檔咸豊朝奏摺』10、301 頁。

86) 花沙納等奏、咸豊三年六月十三日『宮中檔咸豊朝奏摺』9、9 頁。

87) 花沙納等奏、咸豊三年八月初四日『宮中檔咸豊朝奏摺』9、657 頁。

88) 京城巡防処奏審録王大供詞摺(『清代檔案史料叢編』5、178 頁)。

89) 聯順等奏、咸豊三年十一月十五日『鎮圧』11、209 頁。

90) 鳳保奏陳都城軍備未厳民生日蹙摺。

91) 阿霊阿等奏、咸豊二年九月二十四日『宮中檔咸豊朝奏摺』5、862 頁。例えば 1851 年には北京近郊の上清河で「開場聚賭」していた李三ら 73 名が摘発された(載銓等奏、咸豊元年十一月初七日『宮中檔咸豊朝奏摺』3、658 頁)。また 1852 年には北京西部の小屯村などで「結夥持械、攔路搶劫」していた大王二らが逮捕されている(奕經等奏、咸豊二年十一月二十六日『宮中檔咸豊朝奏摺』6、379 頁)。

92) 強盗犯の逮捕については聯順奏、咸豊三年十一月十五日・十一月二十四日『宮中檔咸豊朝奏摺』11、341, 485 頁。アヘン商人の逮捕については阿霊阿等奏、咸豊三年七月二十一日、『宮中檔咸豊朝奏摺』9、528 頁および花沙納等奏、咸豊三年七月二十三日・八月初四日・八月初十日『宮中檔咸豊朝奏摺』9、553, 656, 725 頁。なお宗室の良浩もアヘンを転売しようとして摘発を受けた(奕興奏、咸豊三年八月初十日『宮中檔咸豊朝奏摺』9、731 頁)。

93) 内閣、咸豊三年九月二十日『鎮圧』10、216 頁。

94) 例えば兪昌錫(直隷撫寧県人)らは主人の任地山東から北京へ戻り、さらに帰郷しようとしたところを「衣服蹤跡、情有可疑」として捕らえられた(徳興奏、咸豊三年九月十六日『宮中檔咸豊朝奏摺』10、395 頁)。また帽子に紅布の葫蘆をつけた王文和(直隷武清県人)ら、耳の後ろに疤痕のあった鄧玉堂(直隷武清県人)ら、揚州の清軍陣地から「花槍」を持って一時帰京した春瑞(熱河正黄旗蒙古勒根額佐領下蘇拉)なども不審者と見なされて逮捕された(聯順等奏、咸豊三年十月二十九日・十月三十日・十一月十五日『宮中檔咸豊朝奏摺』11、134, 146, 194 頁)。

95) 阿霊阿等奏、咸豊三年九月初九日『太平軍北伐資料選編』533 頁。

96) 崇恩奏、咸豊三年九月十六日『鎮圧』10、167 頁。これに対して清朝は、もし天津のカトリック信者に太平軍の協力者がいれば厳しく処罰すべきだが、突然の取締りを行って人心を動揺させてはならないと指示した(傳諭、咸豊三年九月二十一日『鎮圧』10、230 頁)。

97) 奎章奏、九月十一日『鎮圧』10、94 頁。

98) 何彤雲奏、咸豊三年九月二十日『鎮圧』10、218 頁。

99) 鳳保奏陳都城軍備未厳民生日蹙摺。

100) 成琦「巡防紀略」『主善堂主人年譜』(『太平軍北伐資料選編』551 頁)。

101) 軍機大臣、咸豊三年九月初九日『鎮圧』10、18 頁。

102) 福済奏、咸豊三年九月二十日『鎮圧』10、228 頁。

103) John Scarth, *Twelve Years in China*, (London: Thomas Constable, 1860), p. 172.

104) "The Conclusion of a Report by A. de Bourboulon, French Minister to China," Prescott Clarke and J. S. Gregory, *Western Reports on the Taiping*, (London: Croom Helm, 1982), p. 90.

105) 小島晋治「吉田松陰と太平天国」『中国近代思想史研究会会報』8、1960 年。同「幕末日本と太平天国——水戸藩のある庄屋の「見聞記」の記事にふれて」『太平天国革命の歴史と思想』研文出版、1978 年。市古宙三「幕末日本人の太平天国に関する知識」『近代中国の政治と社会』東京大学出版会、1971 年。郭連友「太平天国と吉田松陰の思想形成」『日本思想史学』31、1999 年。

106) 鳳保奏陳都城軍備未厳民生日蹙摺。

107) 羅惇衍「京畿根本重地不宜小利而失人心摺」(咸豊四年正月初三日)『羅文恪公遺集』巻上。

108) 英綬奏、咸豊三年九月初十日『鎮圧』10、73 頁。軍機大臣、咸豊三年九月初十日『鎮圧』10、74 頁。

109) 勝保奏、咸豊三年九月十三日『鎮圧』10、124 頁。桂良奏、咸豊三年九月十二日『鎮圧』10、118 頁。

110) 勝保奏、咸豊三年九月十七日『鎮圧』10、188 頁。

111) 勝保奏、咸豊三年九月十七日・二十一日『鎮圧』10、189, 234頁。光緒『深州風土記』巻 5、歴代兵事。

112) 勝保奏、咸豊三年九月二十一日『鎮圧』10、236 頁。

113) 文謙奏、咸豊三年九月二十四日『鎮圧』10、270 頁。桂良奏、咸豊三年九月二十七日『鎮圧』10、312 頁。咸豊『献県志』巻 1、兵事。

114) 桂良奏、咸豊三年九月二十七日『鎮圧』10、312 頁。また民国『交河県志』によると、知県孔慶銈は張維鑒(道光年間進士)と団練の結成を進めたが、太平軍は練勇の防衛線を迂回して県城を攻撃した(巻 5、宦績)。またこの日壮勇たちは市場に出かけて不在だったために抵抗出来なかったという(王蘭広「前交河県知県孔公鞠農伝」『王香圃先生文集』巻 4、『太平軍北伐資料選編』420 頁)。

115) 崇恩奏、咸豊三年九月二十八日『鎮圧』10、328 頁。

116) 勝保奏、咸豊三年九月二十七日『鎮圧』10、313 頁。

117) 勝保奏、咸豊三年十月初二日『鎮圧』10、366 頁。

118) 軍機大臣、咸豊三年九月二十日『鎮圧』10、223 頁。勝保奏、咸豊三年九月十七日『鎮圧』10、186 頁。

119) 勝保奏、咸豊三年九月二十三日『鎮圧』10、261 頁。

120) 勝保奏、咸豊三年九月初三日『鎮圧』9、545, 548頁。ただしこの段階では直隷南部から山東東昌府へ向かう可能性と併記している。

121) 勝保奏、咸豊三年九月二十三日『鎮圧』10、262 頁。

122) 軍機大臣、咸豊三年九月二十三日『鎮圧』10、257 頁。

123) 勝保奏、咸豊三年九月二十七日『鎮圧』10、313 頁。

124) 姚憲之『粤匪紀略』(『太平軍北伐資料選編』457 頁)。また馬振文「粤匪北犯紀略」にも「勝師以兵寡不敢逼賊、常在後十餘里安營」「勝師以孤軍追賊、賊常刊木書"勝保免送"」という記事が見られる(「粤匪犯臨清紀略」『太平天国』5、184, 185 頁)。

125) 勝保奏、咸豊三年十月初二日『鎮圧』10、366 頁。

126) 勝保奏、咸豊三年九月二十三日・九月二十七日『鎮圧』10、262, 313 頁。

127) 勝保奏、咸豊三年十月初二日『鎮圧』10、368 頁。

128) 呉廷溥奏、咸豊三年九月二十七日『鎮圧』10、310 頁。

129) 竇文藻『癸丑兵燹記』（民国『臨汾県志』巻 5、藝文類）。龔浱『耕餘瑣聞』（『太平軍北伐資料選編』353 頁）。また司徒照奏、咸豊三年十一月初五日『鎮圧』11、103 頁も「惟平陽府燒燬房屋數千間、財物搶掠一空、被害者萬餘人。聞八月初十日賊初入平陽城時、殺人尚不多、十二日北竄、逼脅城中難民爲之擡砲、行止距城十里之高河橋。適遇官兵接仗、擡砲難民將砲口倒向、轟斃賊匪數百名、並傷其頭目一人。賊益憤恨、復回城中大肆荼毒」と述べている。

130) 陳思伯『復生録』（続編『太平天国』4、346 頁）。

131) 董友筠「滄州失城紀略」、陳鍾祥「滄州満漢文武官紳被難情事状」（『太平軍北伐資料選編』423, 425 頁）。また何燮『粤氛紀事』巻 5、北路奏膚も「賊遂於二十五日竄滄州……。其滄州駐防之避難不及、同日受害者、據奏報男婦大小二千數百人。賊自入直境以來、此其受創之最重者、故積忿屠之」とあり、太平軍は損害の大きさに憤って 2,000 人以上を虐殺したと述べている（続編『太平天国』4、155 頁）。

132) 綿勲奏、咸豊三年十二月初二日『鎮圧』11、399 頁。

133) 簡又文『太平天国全史』上冊、612 頁

134) 張守常『太平天国北伐史』92 頁。なお郭廷以『太平天国史事日誌』（重慶商務院書館、1946 年）は「李開芳、林鳳祥等攻下滄州、殺知州沈如潮等、直趨天津」（277 頁）とだけ述べ、とくに虐殺行為については言及していない。

135) 菊池秀明「太平天国と歴史学――客家ナショナリズムの背景」（岩波講座『世界歴史』20、アジアの近代・19 世紀、岩波書店、1999 年。また南京、杭州における満洲人虐殺については『太平天国史事日誌』230, 840 頁を参照のこと。筆者は太平天国の排他的なナショナリズムが、洪秀全の『旧約聖書』に偏ったキリスト教理解によって、ユダヤ・キリスト教思想の「非寛容」を受容した結果であると考える。

136) 林鳳祥等奏、太平天国癸好三年五月十六日『鎮圧』7、518 頁。

137) 王茂蔭奏、咸豊三年十月十二日『鎮圧』10、480 頁。

138) 勝保奏、咸豊三年八月十五日『鎮圧』9、252 頁。

139) 光緒『深州風土記』巻 5、歴代兵事。

140) 光緒『趙州志』巻 10、人物志、忠烈。

141) 黄彭年『黄陶樓先生日記』第 18 冊、白雲編（『太平軍北伐資料選編』298 頁）。

142) 陳思伯『復生録』（続編『太平天国』4、351 頁）。

143) 龔浱『耕餘瑣聞』（『太平軍北伐資料選編』353 頁）。

144) 京城巡防処奏審録賈幅営供詞摺（『清代檔案史料叢編』5、183 頁）。

145) 京城巡防処奏審録馬二雪供詞摺（『清代檔案史料叢編』5、181 頁）。

146) 巡防大臣奏、咸豊三年十月十七日『鎮圧』10、562 頁。

147) 馬崑「諭貧民」（宣統『任県志』巻 8、藝文）。

148) 京城巡防処奏審録王大・榮雪兒供詞摺（『清代檔案史料叢編』5、178, 180 頁）。

149) 京城巡防処奏審録賈幅営・王泳汰供詞摺（『清代檔案史料叢編』5、183, 185 頁）。

150) 京城巡防処奏審録馬二雪・王泳汰供詞摺（『清代檔案史料叢編』5、181, 185 頁）。

151) 太平天国の性に対するタブー視は拝上帝会時代に始まり、金田団営時に男営、女営が組織された。南京到達後はそれぞれ男館、女館となり、1855 年に東王楊秀清の命令により廃止された（酈純『太平天国制度初探』第二次修訂本、上、中華書局、1989 年、252 頁）。

152) 陳思伯『復生録』（続編『太平天国』4、347 頁）。

153) 瑞昌奏、咸豊三年十月初一日『鎮圧』10、359 頁。

154) 聯順等奏、咸豊三年十二月初九日『鎮圧』11、474 頁。

155) 張裕修供、咸豊三年十一月初一日『鎮圧』11、68 頁。張裕修は河南信陽州出身で、謝五堂の率いる捻子に加わり、1,000 人余りを集めて「就做大黄布旗一面、上寫平定王、小藍旗六桿。假装粤匪、頭紮紅巾」とあるように太平軍を装って正陽県城を襲撃した。また勝保も「近來各處土匪又多頭裹紅巾、冒爲逆賊、以圖擄掠鄉村」とあるように、太平軍の出で立ちを真似て掠奪を働く土匪が多いと報じている（勝保奏、咸豊三年九月十七日『鎮圧』10、191 頁）。

156) 吉澤誠一郎「天津団練考」（『天津の近代――清末都市における政治文化と社会統合』43 頁）。また文謙等奏、咸豊三年九月十三日・九月二十一日『鎮圧』10、129, 237 頁。

157) 丁運枢等編「防剿粤匪」（『張公襄理軍務紀略』巻 1、『太平軍北伐資料選編』468 頁）。

158) 呉惠元「天津剿寇紀略」、同「附編」（同治『続天津県志』巻 17、藝文・巻 20、雑記）。なお同書によると、この日の攻撃を指揮したのは開山王（小禿子）となる人物で、城西の姜家井にいた李開芳は天津の兵勇が城を捨てて逃亡したのではないかと楽観的な予測をしていたが、開山王が戦死したとの報告を受けて驚いたとある。

159) 陳思伯『復生録』（続編『太平天国』4、345, 347 頁）。

160) 東王楊秀清致文翰爵士函、太平天国癸好三年三月二十六日（続編『太平天国』10、33 頁）。

161) *Inclosure 3 in No. 6. Sir George Bonham to the Insurgent Chiefs, April 28, 1853*, Irish University Press Area Studies Series, vol. 32, (British Parliament Papers: China, 1971), p. 41.

162) 李開芳又供（『清代檔案史料叢編』5、165 頁）。

163) 僧格林泌咨呈審録王自發供詞文（『清代檔案史料叢編』5、175 頁）。

164) 丁運枢等編「防剿粤匪」。

165) 文瑞等奏、咸豊三年十月二十一日『鎮圧』10、612 頁。

166) 汪元芳奏、咸豊三年十月二十九日『鎮圧』11、30 頁。

167) また羅惇衍は上海小刀会の蜂起によって、浙江の糧米は劉河口から海上輸送しているが、今年度の漕米は往年の三分の一程度しか徴収出来ておらず、「京倉の支絀は異常」であると指摘した。そして彼は急ぎ広東で米を採買し、北京へ輸送するように求めている（羅惇衍奏、咸豊四年正月二十四日『羅文恪公遺集』巻上）。

168) 僧格林泌奏、咸豊三年十月二十四日『鎮圧』10、633 頁。

169) 勝保奏、咸豊三年十月二十日『鎮圧』10、599 頁。

170) 京城巡防処奏審録王二格供詞摺（『清代檔案史料叢編』5、178, 180 頁）。

171) 僧格林泌咨呈審録王自發供詞文。

172) 巡防大臣奏、咸豊三年十月十七日『鎮圧』10、562 頁。

173) 張亮基奏、咸豊四年二月十五日『鎮圧』12、521 頁。

174) 呉惠元「天津剿寇紀略」。

175) 附署順徳府知府高午稟文、桂良奏、咸豊三年九月十五日『鎮圧』10、151 頁。

176) 僧格林沁咨呈審録王自發供詞文。

177) 張興保供（『清代檔案史料叢編』5、169 頁）。

178) 陳思伯『復生録』（続編『太平天国』四、347 頁）。僧格林沁咨呈審録王自發供詞文。

179) 勝保奏、咸豊三年十月初六日・十月初八日・十月初十日『鎮圧』10、408, 431, 461頁。なお勝保と出撃した天津の壮勇について、張集馨は「天津勇率多無頼、私鬪則勇、殺賊則怯。其時鹽政文謙、天津道張起鵬、天津府錢炘和、輪流管帶、距城二、三里即不肯前進、只好作飾觀耳。而文謙膽尤情薄、更不敢前」（『道咸宦海見聞録』中華書局、1981 年、134 頁）とあるように、彼らが戦力として全く役に立たず、とくに文謙が臆病だったと述べている。

180) 慶祺奏、咸豊三年十月初八日・十月十五日『鎮圧』10、434, 534 頁。

181) 勝保奏、咸豊三年十月初十日『鎮圧』10、462 頁。

182) 勝保奏、咸豊三年十月初十日『鎮圧』10、463 頁。

183) 軍機大臣、咸豊三年九月十三日『鎮圧』10、119 頁。

184) 鳳保奏陳都城軍備未厳民生日蹙摺。

185) 載銓奏、咸豊三年十月十五日『鎮圧』10、545 頁。

186) 軍機大臣、咸豊三年十月十八日『鎮圧』10、582 頁。

187) 軍機大臣、咸豊三年十月十八日『鎮圧』10、584 頁。

188) 軍機大臣、咸豊三年十月十一日『鎮圧』10、476 頁。

189) 軍機大臣、咸豊三年十月十八日『鎮圧』10、582 頁。

190) 勝保奏、咸豊三年十月三十日『鎮圧』11、44 頁。また軍機大臣、咸豊三年十一月初一日『鎮圧』11、60 頁。

191) 勝保奏、咸豊三年十月三十日『鎮圧』11、44 頁。

192) 勝保奏、咸豊三年十月三十日、十一月初八日『鎮圧』11、47, 117 頁。

193) 銭慶善奏、咸豊三年十一月十五日『鎮圧』11、213 頁。戴銓奏、咸豊三年十二月初四日『鎮圧』11、424 頁。この他に勝保が稍直口の戦いで名をあげた天津の壮勇を妬み、これを用いようとしないといった批判もあった。そこで勝保が壮勇を率いて出撃すると、彼らは勝保を置き去りにして逃走したという（張集馨『道咸宦海見聞録』134 頁）。

194) 勝保奏、咸豊三年十一月初五日『鎮圧』11、119 頁。

195) 勝保奏、咸豊三年十一月二十四日『鎮圧』11、312 頁。

196) 内閣、咸豊三年十一月二十六日『鎮圧』11、338 頁。

197) 桂良奏、咸豊三年十二月二十五日『鎮圧』12、73 頁は、唐県、束鹿州、塩山県、青県などで蜂起した「土匪」を弾圧した事実と、直隷の団練 40 万人が編制されたことを報じている。また張守常「太平軍北伐與北方的群衆闘争」（『太平軍北伐叢稿』102 頁）を参照のこと。